

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol. 1 No. 2
 発行人 阪本 是丸
 編集人 松本 久史
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

プロジェクト報告

デジタル・ミュージアムの構築と展開

井上 順 孝

一、統合的なサイトの構築

デジタル・ミュージアムの構築と展開のプロジェクトは、大きく二つの課題をもっている。一つは研究開発推進機構の各プロジェクトのデジタル化の統合的推進という課題であり、もう一つは本プロジェクト独自のコンテンツの構築である。それそれぞれについて本年度実施してきた事業の概要について述べていく。

まず、研究開発推進機構内のプロジェクトのデジタル化の統合的推進であるが、これについては企画委員会を設置した。定例の会議を開催して、相互の事業の目指すところについての理解を深めながら、平成二十一年度に入予定の新しいソフトウェアに関する議論を重ねた。その議論の展開の過程で、実務上の問題を検討していくための、各プロジェクト

の実務担当者などによるワーキング・グループの必要性が感じられるようになり、それを発足させて検討を重ねた。

企画委員会のメンバーは次のとおりである。井上順孝(責任者)、石井研士、市川収、内川隆志、遠藤潤、大澤広嗣、小川直之、加瀬直弥、加藤里美、黒崎浩行、千々和到、平藤喜久子、藤田大誠、N・ヘイウヅ、星野光樹、星野靖二、堀越祐一、松本久史(以上教員)、安達匠、及川聡、後藤幸雄、斉藤崇樹、堀内弘行(以上職員)

現在、機構のもとでは、のちに述べる本プロジェクト独自のコンテンツであるEOS(Encyclopedia of Shinto) 神道関係の論文の双方向の翻訳の他、次のようなデータベースが、すでにインターネット上に公開を開始して

目次

プロジェクト報告	井上 順孝	1
デジタル・ミュージアムの構築と展開	松本 久史	3
近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究	松本 久史	3
「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用	高塩 博・柴田 紳一	4
カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立	松本 久史	7
日本神話の神話学的研究	平藤喜久子	9
万葉集における神事語彙の基礎的研究	辰巳 正明・城崎 陽子	10
現代日本の情報環境における健康とメディア文化	野村 一夫	12
『詩人大使』ポール・クローデルの総合的研究	濱口 學	13
雑穀文化と日本の基層信仰	加藤 里美	14
幕藩刑法とその刑罰の研究	高塩 博	16
日本近代政治史の諸問題	柴田 紳一	17
公開学術講演	小林 達雄	19
まつりの心と形	小林 達雄	19
第三十三回 日本文化を知る講座①	阪本 是丸	21
國學院の学問を貫徹するもの【校史・学術資産研究センター】	藤田 大誠	22
総合的学問「国学」を継承してきた皇典講究所・國學院	藤田 大誠	21
第三十三回 日本文化を知る講座②	吉田 恵一	23
考古学と「こころ」【学術資料館考古学資料館】	内川 隆志	25
こころの形	内川 隆志	25
第三十三回 日本文化を知る講座③	岡田 莊司	26
「も」から見た神道の面白さ【学術資料館神道資料館】	加瀬 直弥	27
神道のこころとカタチ	加瀬 直弥	26
第三十三回 日本文化を知る講座④	平藤喜久子	28
神道を外国人にどう伝えるか【日本文化研究所】	井上 順孝	29
神道を外国人にどう伝えるか(一)	井上 順孝	29
神道を外国人にどう伝えるか(二)	井上 順孝	29
彙報	井上 順孝	30
所蔵資料紹介 祇園祭礼絵巻(神道資料館所蔵)	井上 順孝	32

SはCOEプログラムの事業の一環として実施され、同プログラムが終了した平成十九年三月に、所期の計画通り、國學院大學日本文化研究所編『神道事典』の本文を改訂・英訳し、さらに編集作業を重ねて、オンラインで全面公開した。その後、この事業を展開させるべく、新たな課題を設定した。

本年度はEOSに新たな事項を追加し、またグロッサリーの作成を行った。さらに各項目にリンクされた画像・映像を大幅に追加した。このうち新規の事項として作成したものは、平成十八年度に本学の大学院でCOE関連の講義を受講した院生が作成した事項や画像、映像が含まれている。

グロッサリーは日本語及び英語の双方から調べられるようにした。また神社については別途一覧表を作成し、資料編に登場する神社名も含めてリストアップした。COEプログラムによる国際会議においては、外国人研究者から、初心者用の神道案内のサイトの作成に対する要望がたびたび出された。そこでこの要望に応えられるように、新たな試みに着手した。これがオンライン公開されるのは来年度となる予定であるが、神道に関する基本的用語が分からない外国人でも、イラストから説明にたどり着けるような仕組みを試作中

である。

EOSの内容は基本的に十数年以上前の研究成果であるので、最近の神道研究の動向についても国外に発信する必要が感じられている。また国外で刊行された神道関係の論文を日本語に翻訳してオンラインで公開することも有意義である。そこで、日本語から外国語へ、また外国語から日本語へと、神道関連の研究論文を双方向に翻訳する事業が平成十八年度から始められた。これについては、本年度は四点が翻訳された。日本語から英語へが二点、日本語から英語へが二点である。

この双方向の翻訳は日英間には限られていない。九部からなるEOSの各章の総論部分は、すでに英語の他、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語にも翻訳されている。論文翻訳も、昨年は日本語から韓国語への翻訳が一点なされた。欧米の言語のみならず、アジアの言語との双方向での翻訳を目指している。

教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化もCOEプログラムによって、一定の目標を達成した。そこで、このオンライン公開を図る段階となった。神理教、神道修成派、黒住教の教団資料は、以前の日本文化研究所のプロジェクトによりマイクロフィルムとして所蔵している。これらのうち、重要度の高

いものについては、TIFFファイルとしてデジタル化し、その目録もデータベース化を進めた。新しいシステムが導入された段階で、公開の方法を具体的に進める予定である。また

プロジェクト報告

近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究

松本久史

昭和三十年の日本文化研究所設立以来、「設立の趣旨」に沿った研究課題のひとつとして、国学に関する研究は継続的に行われて多くの成果を残してきた。この歴史的経緯に鑑み、平成十九年四月に研究開発推進機構のもとに再編された日本文化研究所においても、規程により恒常的な研究部門として「神道・国学研究部門」が設置され、新たに本プロジェクトが立てられることとなった。

目的と方法

本居宣長の黄泉国論や「安心なきが神道の安心」と説いた他界・靈魂観は国学者の靈魂観の代表的な主張と理解され、研究の蓄積もなされている。一方では、平田篤胤の『靈能真柱』で主張された幽冥界は、民俗的な他界観との親和性も指摘されて

たウェブ上での公開に際しては、当然教団側の了解が必要になるので、そうした作業を経たのち、次年度にオンライン化を開始する。

いる。近代以降は村岡典嗣の提唱した、宣長迄の文献学的な性格の強かった国学を篤胤が宗教化したという「定説」により、国学者の靈魂観といえば、篤胤以降が中心的な対象となつていく。さらに、六人部是香、矢野玄道ら篤胤門人の靈魂観や明治維新以降の神道国教化政策、大教宣布運動、祭神論争など、明治初期の政府の神道・神社政策と絡めて議論されることも多い。これら国学者の著述に見られる「靈魂観」を抽出して比較し、相互の影響関係を考察するというのが国学研究における靈魂観を検討するオーソドックスな手法であったといえよう。しかしそれらの考察は、思想そのものと実践の関係を十分に説明できてはいないので、なからうか。

具体的に「実践」という時、真つ

先に神葬祭が想起されるであろう。例えば、鈴門系の岡熊臣の例などは、国学者の思想と行動の関係を示す好例である。しかし、近世寺檀制度の中で、神葬祭は神職固有の問題であり、必ずしも国学者全体が共有したものである。そこで、全国の国学者たちが「死者を祀る」行為として執行した、「霊祭」や「年祭」へまで対象を広げて考察することとした。さらに、幕末に偏っている時代の幅も広げなければならない。現在、考察の基点としては荷田派の霊祭や神葬祭運動を想定しており、荷田派の神職門人による神葬祭の執行、続いて遠江における高林方朗を中心とした直長・真淵の霊祭と県居豊社建立運動の展開や、それと呼応する形での三河における草鹿砥直隆・羽田野敬雄らの平田派の活動にも着目し、近世の中期から幕末期に及ぶ調査対象を設定した。

また、思想そのものの実証的な検証もこれらと並行して行わなければならない。具体的には霊魂観の表明されている諸テキストであり、成立の過程、写本の伝本、版本の刊行形態をも含めた検証を進めていく。

本年度の活動内容

まず、霊魂観を表明している国学者の代表的な著述であり、その後の影響力から国学的霊魂観を考える上

で重要である篤胤の『霊能真柱』について、全国的な所在状況を概観したりリストを作成しつつ、活字本の諸ヴァージョンを検討した。その過程で、巻末の著述書目に関する情報を分析すると、四度以上版を重ねていること、再版時に内容が部分的に改められていることなどの事実が明らかになった。そして、活字本は底本が確認できないといった問題を抱えていることが確認された。その結果、伝来が確実な底本に基づき、定本としての性格をそなえた『霊能真柱』の校訂の必要性が認識され、それが作業課題となった。現在、最も古い時期に刊行された本の一つと推定される本居文庫本を底本に選んで、本文の電子データ化作業を進めている。また、この作業と並行して、諸書の『霊能真柱』への言及を調査し、リスト化を行っている。既に『三大考弁々』、『天説弁』、『千代乃住処』についての作業が完了した。

さらに、従来から継続している奥州相馬の篤胤門人の高玉安兒宛の平田鏡胤書簡については、本プロジェクトが継承することとなり、一年を通じて定期的に研究会を開催し、解説を進めた。そのうち三十五通分の書簡については翻刻を平成二十年三月発行の『紀要』第百号に掲載する。

なお、本プロジェクトは研究開発推進機構への組織再編に伴う暫定的

な措置としてプロジェクト期間を一年としたため、基礎的な調査の段階に止まってしまい、分析をふくめた研究の深化という点においては遺憾なしとしない。しかし、二十年度からは日本文化研究所の神道・国学研

プロジェクト報告

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用

國學院大學図書館所蔵 佐佐木高行家旧蔵書目録の編纂・刊行について

高 塩 博
柴 田 紳 一

『佐佐木高行家旧蔵書目録』編纂刊行の事は、國學院大學日本文化研究所の総合プロジェクト「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」の事業として、図書館との全

この『佐佐木高行家旧蔵書目録』の編纂作業が引き続き図書館との連携により開始されたものである。

面的な提携のもと、平成十七年度に発足した。同十九年度からは國學院大學研究開発推進機構のなかに新設された校史・学術資産研究センターがプロジェクトを継承し、この事業を続行した。先の総合プロジェクトにおいて、國學院大學創立二〇周年記念学術関係事業に指定された『梧陰文庫総目録』（平成十七年三月、東京大学出版会）の刊行を終えた後、

究部門の新たなプロジェクト「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究 霊祭・霊社・神葬祭」として引き継がれ、本年度の調査・研究が生かされていく予定となっている。

佐佐木高行の旧蔵書を中心とする「佐佐木家旧蔵図書」は、本学が大正九年（一九二〇）四月、「大学令」による大学昇格を控えた大正八年十月二十一日の理事会決議により、寄託が決議された（二三七二点）。この寄託は佐佐木高行が明治二十九年（一八九六）から同四十三年（一九一〇）の長きにわたり、國學院の第三代院長および初代学長を勤めた縁由によるものである。その寄託分の仮目録

は、図書館において作成されたが、この仮目録は、むしろ受入台帳と言うに近く、またこの仮目録自体が一般に公開されることはなかった。しかし、この「佐佐木高行旧蔵書」には、単に一般図書だけではなく佐佐木高行が所持した公文書類なども含まれ、わずかではあるが高行の子息高美、孫行忠の旧蔵書も混入している。

従来からも、その存在は研究者等には知られており、「佐佐木家旧蔵図書」を利用した研究成果も一、二には留まっていなかった。しかしながら独立のカード目録は作成されておらず、一般図書のカード目録に混排されている。また前記冊子形式の目録も、十分に利用される状況にはなかった。今回の目録作成により、「佐佐木家寄託図書」の全容が明らかになるとともに、利用者にとってはこれまでの利用の不便さが解消され、研究面での進展も大いに加速されることと思われる。

前記寄託の後、高行の子息高美氏が所持していた「佐佐木高美旧蔵洋書」(二四五点)も寄託された。佐佐木高行・高美親子旧蔵の寄託図書は、現在の御当主佐佐木行美氏(高行の首孫・東京大学名誉教授・本学顧問)の格別の計により、平成十八年三月二十四日、寄贈に切り替えていた

だった。

また昭和三十六年九月五日、國學院大學理事長兼学長の職にある行忠氏はその所蔵する書籍(和書一五〇点・洋書八〇点)を本学に寄贈された。つまり、ここに公刊する『佐佐木高行家旧蔵書目録』は佐佐木家三代(高行・高美・行忠)の旧蔵書目録なのである。

さて、ここで佐佐木家三代の経歴を簡単に紹介する。

高行(一八三〇～一九一〇)は、天保元年、土佐藩土佐佐木高順(たかより)の次男として土佐国吾川郡瀬戸村(現在の高知市長浜)に生まれた。八歳で「習字読書を修めたが、固より家貧しいので書物を買ふの金がないから、藩校教授館の書庫から借りて筆写して読んだ、其の写本の四書五経は、今猶同家に保存されて居るさうだ(現在の「佐佐木家旧蔵図書」には含まれていない)。(津田茂麿「明治聖上と臣高行」昭和十年刊)と早くも集書への関心を示している。儒学・国学・兵学を学び、藩政の面では文武調役・作事奉行・郡奉行・普請奉行・大目付などを歴任し、一方で藩内の尊攘派との連絡もあった。慶応三年には京都で後藤象二郎・坂本竜馬らと大政奉還建白につき協議している。明治元年には海援隊を率いて長崎奉行所接收に当たった。新政府に入り、

浦上基督敎事件処理にも関与した(これら長崎関係史料は「佐佐木家旧蔵図書」の中に若干含まれている)。四年

には司法大輔として岩倉遣外使節団に参加し、帰国後は元老院議員となる(司法省・元老院関係史料も「佐佐木家旧蔵図書」に若干含まれている)。十一～十二年一等侍補となり明治天皇側近として東北御巡幸に随行した(この時佐佐木が受理した各種陳情・建白等の史料は「佐佐木家旧蔵図書」に比較的まとまって残されており、一部は『明治建白書集成』に採録されている)。また、この随行に関連するものが、旧会津藩関係者による著述にも独自のものが見られる。十四年参議兼工部卿、十七年伯爵、十八年宮中顧問官、二十一～四十三年枢密顧問官を務めた。その間二十九年に皇典講究所長兼國學院長となった。四十二年侯爵、四十三年逝去、享年八十一。高美(一八六二～一九〇二)は高行の長男として、文久二年、土佐国土佐郡杵田村(現在の高知市旭元・南元町)に生まれ、年少より漢学・洋学を修める。明治十六年、外務省御用掛を命ぜられ、十七～二十一年まで英国に留学して、英国憲法・國際公法を研究した。帰国後、官を辞すと、二十三年には東京文学院を創立し、自ら院長となり、國際法も教授する。二十九年に父高行が皇典講究所長・國學院長となると、これを助けて経

営の任に当たる。三十五年、病のため逝去、享年四十一。

行忠(一八九三～一九七五)は高美の長男として、明治二十六年、東京に生まれる。大正六年に京都帝國大學を卒業、東京帝國大學を中退した。昭和十一年、皇典講究所長に就任、十二年に貴族院副議長を務める。戦中・戦後の困難な時代に國學院大學学長・東京大神宮宮司・神宮(伊勢神宮)大宮司を歴任、三十四年、神社本庁第三代総理となり、神社神道の復興に尽力した。五十年逝去、享年八十三。以上に見るように佐佐木家三代の当主は國學院大學にとって大恩人なのである。

次に「佐佐木家寄託図書」の全体像の一端を分類表を示すことで紹介しよう。

A、佐佐木高行旧蔵書

神道
宗教
思想
教育
歴史・伝記
地誌・紀行
言語・文学
社会
政治・法律
経済・産業
統計
科学
軍事

美術・諸芸
雑

B、佐佐木高美旧蔵洋書

辞典・辞書・言語学

歴史

政治・社会・法律

文学

地誌・紀行

伝記類

雑(宗教他)

C、佐佐木行忠旧蔵書

前記のように、佐佐木高行は早くから集書に興味を示したが、後年の演説筆記や論文の中に「群書類従を読む」や「読史所感」などがあるように、高行は特に歴史書に関心が深かったようである。特に幕末・維新时期に関する写本も豊富である。また、司法省関係の図書には書き込みも見られる。さらに晩年には、日光東照宮の官司で幕末の儒者林家の当主から旧幕府関係の秘書を書写している。その他、各種地図や囲碁関係図書も比較的豊富である。なお、統群書類従完成会から翻刻・刊行された『泰平年表』のように、種々ある写本の中から「佐佐木高行旧蔵書」を底本としたものもある。

ことが蔵書印によって判明する。それから上記分類表のA、Bの中には先記のように高美・行忠の旧蔵書が少しばかり混在する。たとえば高美が留学先のロンドンから留守宅に送った図書や、行忠が自ら少年雑誌を切り取り貼り付けたスクラップブックなどである。加えて渡辺洪基が岩倉遣外使節団の随員として米国で購入し書き込みした洋書なども含まれている。

本目録編纂に携った者は、以下の通りである。

高塩 博

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 教授)

柴田 紳一

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 准教授)

西岡 和彦

(國學院大學神道文化学部准教授、平成十七、十八年度)

齊藤 智朗

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 助教)

池田 直隆

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

城崎 陽子

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

史・学術資産研究センター 客員研究員)

高見 寛孝

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

長又 高夫

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

宮部 香織

(國學院大學研究開発推進機構 校 史・学術資産研究センター 客員研究員)

古山 悟由

(國學院大學学術メディアセンター 事務部図書館事務課長)

長谷川 孝彦

(國學院大學学術メディアセンター 事務部図書館事務課長)

安達 匠

(國學院大學学術メディアセンター 事務部図書館事務課主任)

千家 慶子

(國學院大學学術メディアセンター 事務部図書館事務課書記)

目録編纂の作業は、次のようにして行われた。図書館において現物を確認しながらの作業は、図書館側との緊密な連携の下、長又を責任者として、齊藤、城崎、高見、宮部がこれを担当し、「佐佐木高行旧蔵書」及び

「佐佐木行忠旧蔵書」中の洋書については、同じく図書館側との連携の下、池田が主にこれを担当した。全体の調整は高塩、柴田、古山がはかった。西岡は学部にあつてその専門分野から助言を行い、内山京子(國學院大學大学院史学専攻)・坂根誠(同大学院文学専攻)・高杉洋平(同大学院法学専攻)の三君からはおもに調査と入力作業について協力を得た。

漢籍については、栗田陽介氏(徳心学園横浜高等学校教諭)の助力を得た。難解な蔵書印の判読は、國學院大學文学部教授の佐野光一氏にお願ひした。ともに特記して深謝の意を表するものである。

作業の流れは、受入台帳の登録番号順に一点一点に当り、書誌情報、佐佐木家三代による書き込み、佐佐木家蔵印及び佐佐木家に収蔵される以前の旧蔵者印等の確認、それに基づく入力作業、凡例・索引の作成、さらに必要に応じ現物の再確認等を行った。さらに並行して書名索引・著者名索引も準備している。

この『佐佐木高行家旧蔵書目録』は、本年三月、汲古書院より刊行予定である(B5判、約三〇〇頁、価格未定)。

プロジェクト報告

カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立

プロジェクトの経緯

日本文化研究所において神社神道関係の資料調査は、設立直後の昭和三十四年に総合研究「神社神道関係写真資料の蒐集」(西角井正慶担当)が立てられて以来、継続的に行われてきた。また、その成果についても九州の神社を中心として一部はガリ版刷りの目録が残され、『神社撰集』として史料翻刻がなされている。

三十七年度から四十年代にかけては、鎌田純一氏を中心に「神社神道および神社に関する文献資料の蒐集・整理と刊行」プロジェクトにより、旧官国幣社を中心に本格的な全国規模の史料調査・撮影(蒐集)、目録化(整理)がすすめられ、これもガリ版刷りの目録が作成された(刊行)。また目録から、編年や関係人物によって区分された資料カードも作成された。

このように「蒐集」から「整理」、そして「刊行」という研究のプロセスが確立され、平成にいたっても研究所に継承されていた。杉山林継(現神道文化学部教授)を中心とした「神社史料の集成と研究」プロジェクト

松本久史

トによる愛媛県の大山祇神社や新潟県の弥彦神社などの資料調査も行われ、マイクロフィルム撮影による史料の蒐集を行い、目録や日記の翻刻などが刊行されている。

高根県松江市美保関町に鎮座する旧国幣中社美保神社の調査も前述の昭和三十年代の研究所における調査に端を発している。平成五年度からは本格的な実地調査と撮影が開始されて、撮影されたマイクロフィルムは一六〇本に及んだ。同時に目録の作成も着手され、それらの成果は『美保神社横山家文書目録(社殿造営編)』(平成九年三月)、『美保神社横山家文書目録Ⅱ(祭祀その他)』(平成十四年三月)、『美保神社横山家文書目録Ⅲ』(平成十九年三月)の刊行として結実し、近世期の主要な文書に関しては目録化がほぼ完了した。

目的と方法

本プロジェクトの期間は単年度であり、従来の美保神社を中心的対象にした調査・研究を整理して将来の研究基盤として整備することにより、人文科学における当該分野(カミ信

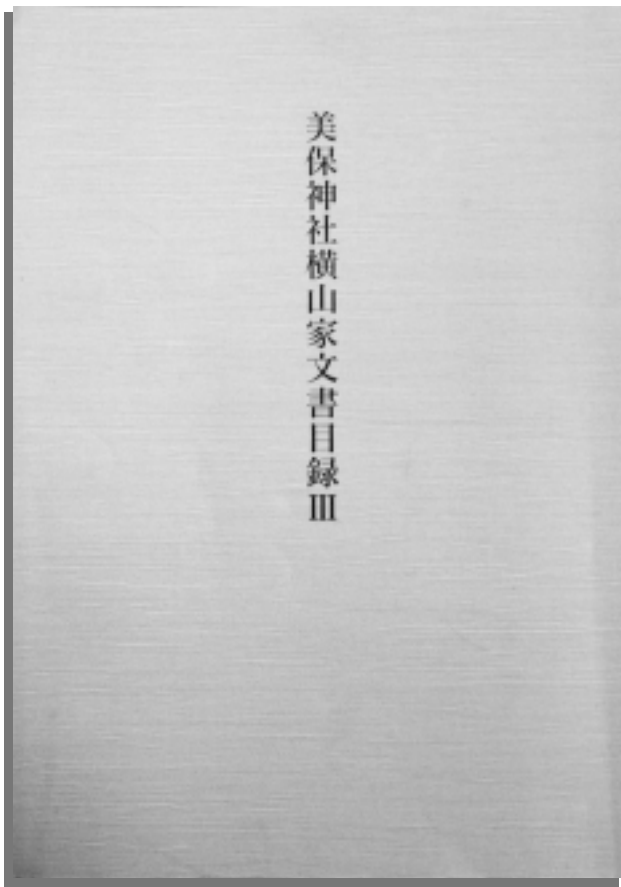
仰研究)の総合的な研究の継承と発展を目指したものである。十六、十八年度の総合プロジェクト「神道と国学の歴史に関する資料的研究」、および兼担プロジェクト「出雲大社の地域史的研究」(西岡和彦准教授担当)、COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における神社史料研究をいずれも継承した研究計画である。十八年度までの総合プロジェクト同様に三つの部門に区分し、各分野の研究課題を設定しつつも、連携して共通の課題に取り組む研究を推進していった。計画立案に当たり、大きな課題を設定した。①考古学部門 祭祀考古

学を中心にする大場磐雄以来の本学祭祀考古学の発展・継承 ②民俗部門 カミ信仰にかかわる民俗研究、柳田・折口民俗学の再検証と現代的継承 ③文献部門 神社・神道史料の収集と分析、神祇史・神道史の統合による神道史学の再構築。これら①②③が連携することによりカミ信仰研究の新分野の開拓を目指す。

活動内容

文献研究面では、美保神社横山家文書目録全三冊を対象に電子データ化を進めた。ここでは、刊行された目録の誤植等をマイクロフィルムおよび現地での実物史料との照合を行

美保神社横山家文書目録Ⅲ



いつつ、訂正しながら入力作業を進めた。また、一部未撮影史料に関してはデジタルカメラによって撮影を行い、デジタルデータとして保存した。また、出雲大社の旧社家赤塚家の文書についても目録化をす

め電子データ化をおこなった。これは今後、研究開発推進機構に構築される「デジタル・ミュージアム」での活用が期待される。
美保神社遺跡出土遺物に関する調査に関しては、同社にて遺物の実見



(裏) (表)

初穂袋(エビス)



(裏) (表)

初穂袋(大黒)

調査を十八年度に引き続き行なった。報告書未掲載の資料が多く、これらについて熟覧、実測、写真撮影を実施した。特に美保神社遺跡出土土馬資料調査については出土した二体のうち、一体は同社所蔵(土馬二号)であり、この資料については修復作業が平成十七年に本学考古学資料館でなされた際に熟覧、実測、写真撮影の調査が行われた。残る一体については東京国立博物館が所蔵(土馬一号)しており、十八年度は調査を実施した。十九年度は一号、二号を併せて比較検討・考察を加え、二体は従来の指摘のように同一人物の手によって製作された可能性が高いことや、二体の製作に関する情報を得た。その詳細は資料紹介を必要第百号に掲載したので参照されたい。加えて、調査対象地である美保神社遺跡を他の祭祀遺跡の中に位置づけるため、出雲地方における祭祀遺跡一覧・関係文献の作成を行った。
民俗関係資料については、十八年度までは美保神社を中心としつつ、鳥取県など周辺の海浜地域における民俗信仰に関する先行研究の蒐集と、現地における調査を行った。十九年度はその成果をデータとしてまとめつつ、信仰対象にも留意して先行研究のデータ化を行った。
なお、平成二十年三月九日には、美保神社をはじめとした美保関地域

の住民、および関心を持つ市民を対象とした成果発表会を松江市美保関町において開催する。これまでにプロジェクトに関わった教員などが成果を総括するとともに、地域へ還元する目的も併せて実施するものである。発表者と題目は以下の通り。「江戸時代の寺社 松江藩内の古文書から」松本美和子、「美保神社の古文書から」①(御祭神について)「横山直正」、「美保神社の古文書から」②(松江藩との関係について)「田中秀典」、「美保神社の古文書の概要と特質」松本久史、「美保神社の考古資料」加藤里美、「美保神社の御神饌」齋藤ミチ子、「美保神社資料調査の十五年間」杉山林継。
本プロジェクトは冒頭に述べた通り、日本文化研究所において継続して行われてきた神社史料調査を受け継いで計画・実施されてきたものである。本プロジェクトを含め、過去の様々なプロジェクトで蓄積された神社関係の史資料・データ・研究業績を今後、さまざまな手法で活用し、研究を深化していくことが研究開発推進機構に求められるであろう。また、その要請に応えていく体制をわれわれは構築しなければならぬであろう。

プロジェクト報告

日本神話の神話学的研究

平藤 喜久子

本プロジェクトは、日本神話の神話学的研究のありかたについて研究すべく、平成十八年度に日本文化研究所の専任プロジェクトとして発足した。本稿では終了となる本年度までの二年間にわたる調査研究の概要について紹介することとしたい。

なお、本プロジェクトには、パリ第七大学助教授のアルノー・プロトンズ氏とフランス国立東洋言語文化研究所助教授のジャン＝ミシェル・ビュテル氏に共同研究員として参加していただいた。

一、プロジェクトの目的

古事記、日本書紀の神話学的研究が行われるようになったのは、明治期になってからのことである。この時期、ヨーロッパではマックス・ミュラーやアンドリュウ・ラングらを中心に神話学、宗教学、人類学が盛んとなっていた。この流れの中でチェンバレンやアストンといった外国人研究者たちが日本神話に注目し、その翻訳、研究がはじまる。そして海外の神話学、宗教学の刺激を受けた高山樗牛、姉崎正治、高木敏雄と

いった日本人の研究者たちによる神話研究も行われるようになった。その後、日本の神話学は、宗教学、人類学、民族学など、隣接分野の研究動向とも密接に関わりながら、そして日本文化、民族の系統研究とも結びつきながら多様な研究方法のもと展開してきた。

本プロジェクトの主たる目的は、明治期以降の日本神話の神話学的研究の歴史的展開と現状について、宗教学、神道学、人類学など、隣接諸科学との関係、欧米の神話研究との関係を調査し、研究することである。こうしたことにより、人々が日本神話をもとに何を語りたかったのかを考えてみることにした。具体的には、以下の四つのテーマを設定し、調査研究に取り組んだ。①明治期における日本神話研究、②昭和前期における日本神話研究、③日本の神話学と欧米の神話学との関係、④現代日本における神話の利用。そこで、それぞれの研究テーマごとに、概要と成果を紹介していく。

二、研究の概要および成果

① 明治期における日本神話研究

日本の神話学は明治三十二年に高山樗牛が「古事記神代巻の神話及歴史」という論文を発表したことを機にはじまったとされる。そこでなぜ樗牛がこの時期に神話研究を行ったのか、という点について研究を行うことにした。研究の過程で、樗牛がこの時期に日本主義に傾倒しており、神話研究は彼の民族主義を背景としたものであることがわかった。その成果については、Ecole Pratique des Hautes Etudes en Sciences Sociales が開催した「France Japan International Joint Seminar <Religion, Religious Studies and Nationalism in Contemporary Japan>」で発表した。また、この発表をもとに論文「Study of Japanese Mythology and Nationalism」(國學院大學二十一世紀OEMプログラム「日本文化と神道」第三号)を執筆した。

明治期には、チェンバレンやアストン、レオン・ド・ロニ、フロレンツら外国人研究者たちによっても古事記、日本書紀の翻訳、研究がすすめられた。これら明治期の外国人研究者たちの神話研究に関しては、平成十八年度より科学研究費補助金(若手研究B)を得ることができたため(研究課題名「外国人による日本神話研究の歴史とその影響に関する研

究」、本プロジェクトと連動して調査、研究をすすめることとした。

② 昭和前期における日本神話研究

明治期以降の日本の神話学には、日本神話の系統を明らかにすることを目的とした研究と、日本人の民族性を論じることを目的とした研究という二つの潮流があるといつてよい。この二つの研究の流れが、日本が植民地を持っていた時代、とくに一九三一年の満州事変をきっかけとしてファシズム体制が強化されていった時代の影響をどう受けていたのかという問題について取り組んだ。研究対象者として松村武雄、松本信広、三品彰英、岡正雄を取り上げ、彼らが神話を比較し、日本の植民地支配拡大を正当化する結論を導き出した。神話から民族性を論じ、天皇崇拜を宣揚する論文を書いたりするようになる過程について研究を行った。その成果は、オーストリア国立科学アカデミーで行われたシンポジウム「Shinto Studies and Nationalism」や本学の近代問題研究会などで発表した。なお本研究は、筆者が研究分担者となっている科学研究費補助金によるプロジェクト「ファシズム期の宗教と宗教研究に関する国際的比較研究」(研究代表者、竹沢尚一郎)とも連携しており、プロジェクトの研究会で研究状況を報告し、助言等をいただいている。

③日本の神話学と欧米の神話学との関係

日本の神話学は、欧米の神話学や宗教学、人類学、民族学の研究成果を取り入れつつ展開してきた。本研究では、日本の神話学がそうした欧米の研究成果をどのように日本神話の理解に援用してきたかについて、宗教学者ミルチア・エリアーデの学説を例に調査、研究した。研究成果は、平成十八年に韓国宗文化研究所で行われた Korea Japan Joint Seminar on Religious Studies 2006 “Reconsidering Eliade from the East Asian Perspectives” や中央大学人文科学研究所における講演などで発表した。

④現代日本における神話の利用

現在、神話に関連したマンガやアニメ、コンピュータゲームは、大変多く作られ、かなりの人気を得ている。本プロジェクトでは、現代の日本社会における神話の利用法についての研究を、神話学の重要な課題の一つと位置づけ、とくにコンピュータRPGを対象として研究を行った。研究の結果、人気を得ているいくつかのRPGは、古典的な神話からさまざまな用語を取り出し、それらを組み合わせ、まったく新しい神話的世界を構築する傾向にあることがわかった。こうした神話の取り扱い方については、「ハイパー宗教」と呼ば

れる現代宗教の特徴とも類似している。この成果は平成十八年に北京大学とハーバード大学が共催した International Conference on Comparative Mythology や同年の日本宗教学会学術大会で発表した。また以下の論文にもまとめている。「現代日本における神話」(『日本文化と神道』第三号)、「ロールプレイングゲームの中の神話学」(『宗教と現代がわかる本』平凡社)、「グローバル化社会とハイパー神話」(『コンピュータRPGによる神話の解体と再生』(松村一男、山中弘編『神話と現代』リットン)。

本プロジェクトは、当初三年間の予定で発足したが、日本文化研究所が研究開発推進機構に再編されたことにもない、一年間に短縮となった。そのこともあり、扱いきれなかった課題も多く、研究成果をまとめるという段階まで進むことができなかった。具体的には、大正期、戦後の神話研究については着手できていない。欧米の神話学との関係についても、エリアーデ以外は扱うことができなかった。しかしながら本プロジェクトにより、明治期、昭和前期の学説史研究については、ある程度研究を前進させることができた。また、現代社会と神話との関係についても、新しい知見を得ることができた。来年度以降は、日本文化研究所

の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトや科学研究費補助金による研究プロジェクトの中で研究を継続させ、研究成果を発信していきたいと考える。

プロジェクト報告

万葉集における神事語彙の基礎的研究

辰巳 正明
城崎 陽子

一、はじめに
平成十七年度から三ヶ年の計画ではじまった兼担プロジェクト「万葉集における神事語彙の基礎的研究」(代表・辰巳正明)では、研究計画の最終年度にあたり、これまでに行ってきた活動の概要と見込まれる成果を報告する。

本研究プロジェクトの目的は、平成十七年七月二十五日発行の「國學院大學日本文化研究所報」にも記しているとおり、『万葉集』を中心とした古代文献にみられる「神事語彙」の再検討にあった。当該プロジェクトを研究的に位置づけるならば、昭和十年代前後に隆盛した国威高揚を旨とする『万葉集』研究の再検討ということに他ならない。中でも、昭和十年に久松潜一・志田延義両氏によって刊行された『古代詩歌に於け

る神の概念』は、「敬神崇祖」や「日本精神ノ開明」といった思潮を掲げ、特に『万葉集』に「神」の概念を追求しようとした。これは、久松潜一がその「序」で述べるように、万葉集において「神の概念」はわが国の「伝統精神の中軸をなす」と考えたからに他ならない。

こうした考え方が当時専らとなり、万葉集研究 特に歌人研究に与えた影響は少なくない。大伴家を部門の名族とし、「海行かば水漬く屍」を「家訓」として説く佐佐木信綱の『大伴旅人・大伴家持』(昭和十四)やその著書の目的を「自己の練成」と神話の復権による「旺盛な戦意」高揚につながることを記した吉村貞司の『人麻呂抄』(昭和十八)など、がこれにあたる。

ところで、久松らの「万葉集に於

ける神の信仰の研究」をダイレクトに受け継いだのが、佐佐木信綱と今井福次郎の共著によって昭和十八年に上梓された『万葉集神事語彙解』である。

「序」によれば、万葉集は、「上代国民の思想感情を盛り込んだ作品であると定位される。しかも、その「思想感情」を一貫しているのは「おほきみは神にしませば」という「信念」であるという。そして、こうした万葉集における神事歌を研究することは「肇国の精神に基づく国民的信念」を発揚するためであるとする。こうした考え方が先にも示した、教育史の流れにも乗ることとなったのは、まさにこの書の成った時代を反映しているといえよう。

そして、半世紀以上が経った今、現在の研究水準にも合致する『万葉集神事語彙解』の刊行を目論んだのである。

二、プロジェクト経過

『万葉集神事語彙解』刊行に向けて行われた『万葉集』における神事語彙の選定の経緯については拙稿「万葉集における神観念 神事語彙の抽出と分類について」(『日本文化研究所紀要』第九十七輯、平成十八・三)に詳しく述べたので、ここでは、辞典項目の概要と、執筆依頼、そして、辞典項目からみえる「万葉集神事語

彙」の特色等を述べてみたい。

『万葉集』を中心に選定された神事関係語彙は平成十八年十二月末段階でおよそ九〇〇余であった。これらは、以下の項目に部類されるものであるが、辞典そのものは、利用の便を考えて五十音順の配列にすることが決められた。

神祇 神話・神名・神霊・神態
祭祀 祭式・葬祭・宴集・巫祝・神座・祭祀具・習俗・禊祓・供物・歳時・呪祝・杜社・言霊
環境 宮都・居処・通交・地理・境界・異境・禽獸・草木
祥災 瑞祥・災異

そして、辞典項目が決定した段階の平成十九年二月、学外の古代文学の研究者およそ七〇名と、学内の古代文学の研究者、若手研究者三〇名に、以下に示した本プロジェクトの目的を記した書面を以て執筆依頼を行った。

『万葉集神事語彙解』を編むことを企画しました第一の目的は、日本文化の伝統あるいは日本人の精神生活の源流を詞の上から考えようとすることにあります。それが、『万葉集』であるのは、『万葉集』には、古代日本人の生活や精神性が強く表れているからにほかなりません。第二に、『万葉集』に見える神事語彙を通して、古代日本人の文化や精神性を、今日の最も新しい知見により解説を

加えようとするものです。第三に、これは専門家のみでなく、日本文化を知ろうとする一般の方々、あるいは外国の方々にも理解できる辞典であることを目的としています。」

当初、原稿の集積の目標は平成十九年八月末日を締切りとし、以下、著者校正一回を経た上で、WEB刊行との目論見であったが、予定はやや遅れている。しかし、平成二十年一月段階で八〇%の原稿が集積していることを考え合わせると年度内の刊行は予定通りに行われることと考えている。

三、『万葉集神事語彙解』の特色

『万葉集神事語彙解』を監修するにあたって、集積された原稿の体裁を整えるという作業と同時に、本辞典がどのような特色を持っているかを通覧する機会を得た。ここでは、内容における本辞典の特色を記しておく。

本辞典の特色は、大きくは『万葉集』という作品を中心とする古代文献を「神事」という視点から再解釈する点にある。それは、様々な文献にみられる「歌詞」の発生の問題をより強く感じさせ、その点を解説に盛り込む点に顕著に現れてくるといえる。具体例をあげるならば、「枕詞」が最も良い例になるだろう。枕詞は四音ないし五音一句の修辭であり、下句との関係性の中で機能

する。特に、折口信夫が早くに指摘している、「時を定めてやってくる神が人との間に交わす呪言としての枕詞」という、折口理論による枕詞の発生論がもっとも興味深い問題として研究史上に残されている。固有名詞との関係性を持つものには、例えば、「そらみつ+大和」「かむかぜの+伊勢」「とぶとりの+飛鳥」「うまさけ+三輪」等々があるが、これらの枕詞に接続する地名は、「大和」にしても、「伊勢」あるいは「三輪」にしても神話的伝承を伴ったものが多い。このために、折口信夫は枕詞を地名の「いんできす」であり、枕詞を伴った地名が歌などに用いられるとき、人々は神の詞を蘇らせることのできる「らいふいんできす(生命指標)」であることを論じた。こうした折口理論を「神事語」という視点から再検討するといった意義も本辞典は持ち合わせているのである。

四、おわりに

平成十九年度三月末をもって終了する本プロジェクトではあるが、その作業の膨大さや、内容の特殊さ、さらには、WEBという新たな試みによる刊行等、今後、さまざまな補足作業が必要となることはいうまでもない。また、このプロジェクトが契機となって新たな学問的展開を生むことも期待される。(文責・城崎)

プロジェクト報告

現代日本の情報環境における健康とメディア文化

社会構築主義による健康言説の社会理論

野村 一夫

概要

本プロジェクトでは、近年注目されている社会情報学と、社会構築主義による「健康と病の社会学」を参照しつつ、現代日本の健康文化とメディアの関係について分析するというのが、始発の問題関心であった。とくに、一九九〇年代から現在に至る十数年における日本社会の情報環境を対象に、健康言説がいかに語られ、人びとの健康意識を構築してきたかを研究したいと考えていた。

具体的には、健康言説の諸類型を中核とする一書を書き下ろす計画だったが、残念なことに、時間経過のため、予定していた版元からの出版が困難になり、書き下ろしの機会を失ってしまった。理論的には構築主義という難解なところがあるものの、説明としては論文水準ではなく新書水準のものをめざしていたので、それにかわる「場所」を探していたが、結果的に二箇所研究成果の一部を展開することができた。

メタメディアリゼーション

第一の場所は、雑誌『談』七四号の特集「ソーエーの生命論」メタメディアリゼーションへの抗い」に掲載された対談「健康言説とメタメディアリゼーション」である(二〇〇五年、五七―八四ページ)。高知大学医学部教授で医療社会学が専門の佐藤純一教授との長めの対談である。そもそもこの雑誌は、編集・発行がたばこ総合研究センターであるものの、実質的な編集制作はアルシープ社がおこなっており、現代思想系の雑誌としてよく知られている。

内容は以下の通りである(編集部によってつけられた見出しによる)。

- (1) つくられるリスクファクター
- (2) 生活習慣病を待望するクライアント
- (3) リスクをモノ化する医療の「リスク論」
- (4) 差別を生み出すヘルシズムの危険性
- (5) 統合医療の真のねらいは何か
- (6) 健康/病気のコード化とメタメディアリゼーション

対談形式であるが、相互に加筆し、編集部によるきわめて詳細な注が施されたものである。なかでも「メタメディアリゼーション」というアイデアは、シビアナ公開の対談であるゆえに生まれたところがあり、討議の重要性を改めて認識した。この概念はここで初めてつけられたものである。将来、詳細な展開を期したいと思う。

実体ない「言説」の世界

第二の場所は、地方紙「信濃毎日新聞」連載の「けんごうブーム考」シリーズに計六回連続掲載された「実体ない『言説』の世界」(二〇〇七年八月十九日―九月二十三日、毎週日曜日掲載)である。編集委員である飯島裕一氏によるインタビュー形式の形で公表されたが、実際にはかなり加筆訂正してある。

内容は以下の通りである(編集部によってつけられた見出しによる)。

- (1) 医学的とは異質な論理
 - (2) 科学と伝統主義が同居
 - (3) 古い道徳観や弱みつく
 - (4) メディアが公共性を付与
 - (5) プロポリスの変遷を分析
 - (6) 正統と異端 闘争の歴史
- 質問に答える形でかなりかみ砕いて説明したものの、構築主義的な研究が新聞に掲載されるのは異例のことであり、これは私の登場の前に他

の研究者のインタビューが積み上げられていたから可能だったと思われる。編集委員の飯島裕一氏は岩波新書の『疲労とつきあつ』健康ブームを問う』の著者・編者であり、私の研究を事前によく調べてくれたので、概説的ではあるが、それなりの展開ができたと思う。

健康の批判理論をめざして

書き下ろしの計画が頓挫したとは言うものの、あきらめたわけではない。今回の日本文化研究所におけるプロジェクトは本年度で終了するが、今後も研究は継続する予定である。今回のプロジェクトでは、試行錯誤もふくめて基礎的な勉強ができたのが幸いであった。熟していないながらも、このプロジェクトで得られたいくつかの新しい論点を挙げておきたい。

第一に、リスク概念と健康概念を一对のものとして議論する可能性がある。通常、健康概念の対概念は病気であるが、現代社会における健康言説が指示する健康なるものの対概念はリスクであるというのが、今回のプロジェクトで得られた確信である。キテンズやベックのリスク社会論との連接が考えられる。この点については、拙著『未熟者の天下 大人はどこに消えた?』(青春新書インテリジェンス、二〇〇五年)の第四

章「リスクで芽生える大人意識」において試験的に論じておいたが、今後、主眼的に論じなければならぬ。

第二に、メタメディアライゼーション概念の創案がある。既述の通り、佐藤純一・高知大学医学部教授との討議の中から創案した概念であるが、医療社会学における既存の「医療化」概念の枠を超えた諸現象を括る総括的概念として使用することが可能である。健康志向社会を理論的に理解する上で手がかりになる概念だと考えている。

第三に、言説分析をメディア言説に応用する可能性である。質的研究法として言説分析はすでに正式な位置づけを与えられているが、メディア言説への応用については、英語圏

では研究書がいくつかが刊行されているものの、日本では具体的研究が始まったばかりである(注目すべき研究として佐藤哲彦『覚醒剤の社会史』東信堂、二〇〇六年がある)。当初の研究計画では、非常に素朴に言説分析の計画を考えていたが、方法的にナイーブであったと反省している。

ともあれ、現代社会における「健康」の位置価値は高くなることはあっても低くなることはないと思われる。健康至上主義は一見して無害のように見えるけれども、社会的にはさまざまな問題を内包している。それらを理論的に分析し、社会に対して問題を批判的に提示することが、この分野における私の課題だと考えている。

プロジェクト報告

『詩人大使』ポール・クローデルの総合的研究 『国際文化交流』と日仏関係史

濱口 學

本プロジェクトは、平成十八・十九両年度に亘って仏国外交官ポール・クローデル(Paul Claudel)を巡る日仏関係史の史料調査を実施した。

日本文化研究所改組の影響から予定を短縮して平成十九年度で本プロジェクトは一旦終了する。

クロードル(一八六八～一九五五)は、「二十世紀最大の詩人」とも評されるが、外交分野でもその辣腕を揮った。彼は外交官試験を首席で合格した後、領事官として長い中国在勤

を経験し経済外交を得意とする極東通になった。第一次世界大戦中に外交官として、ブラジル公使を勤めた後、戦後デンマーク公使に転じ、一九二一年から二七年にかけて、賜暇帰国期間を含め五年有余、駐日大使を勤めた。彼が日本文化に強い関心を示したことは残された史料や文学作品に如実に示されている。クロードルの文学面での業績や日本文化との関わりから、日本でもクロードルの文学芸術面の活動が注目される一方、外交官クロードルの研究は比較的立ち遅れた。文化交流面における彼の努力も、言語、文学、芸術的側面に焦点が当てられ、外交政策の中にそれは正当に位置づけられていない。

また、外交官クロードル研究上不可欠な日本側外務省記録を改めて探索したところ、なお手付かずで残されてきた部分も少なくないことが判明した。そこで本プロジェクトでは、当面、外務省外交史料館所蔵外務省記録に散在するクロードル関係文書の調査・分析を徹底する方針で臨んだ。なお、本プロジェクトの成果は仏国外務省記録等欧米の諸史料とも比較検討の上、いずれ論文の形式で発表されるべきものであるが、本稿では取り敢えず二年間の調査によって判明した外務省記録中の関係史料の概略を報告する。なお、駐日大使時代の記録が質量ともに最も豊富であるが、東京在勤前・在勤後の記録も興味深い内容を含んでいる。以下、日本側の外務省記録調査の骨格である。

一、日本在勤前 福州領事時代
外務省記録にクロードルの活動が表された恐らく最初の記録が、クロードルの福州領事時代のものである。当該期、クロードルは福建省鉱山探掘権獲得を目指して活動していた。当地では仏国と日本とは鉱山・鉄道問題などを巡って兎角競合関係にあった。外務省記録は仏国側の活動を詳細にフォローしているが、次の記録などは特に興味深いものである。

明治三十五年三月一日、豊嶋捨松福州領事は小村外相に対して鉱山探掘権獲得に向けたクロードル領事の活動を報じている。それによると、「仏国領事八再三之(鉱山探掘権)ヲ要求シテ不止ヲ以テ許総督八日本政府ノ抗議センコトヲ申出タルニ仏領事八日本政府八福建ニ於ケル鉄道布設ニ付容喙スルコトヲ得ルモ其他ノ件ニ付テハ何等抗議ヲ容ル、コト不能トノ理由ヲ以テ遂ニ總督ヲ説破した」という。鉱山探掘権獲得に際して見せたクロードルの交渉振りが窺われる。また同時に、同問題に関する一連の史料が「仏国領事」とは記しても、「クロードル」という個人名を一切記録していないことは注目し

研究概要と目的

雑穀とは、稲と並んで日本文化を支えてきた農作物の総称である。我が国で農耕が開始された当初、雑穀栽培は稲作と並んで食糧生産において重要な位置を占めていたことが指摘されており、それは近代に至るまで継続されてきた。また、その周りには特有の文化が存在し、信仰との関わりでも神社の祭礼やそれ以外の民間信仰においても雑穀に関するものが散見され、それらは現在にも息づいている。

農耕文化研究において、稲作は弥生時代以降になると本格的に受容され、それ以降、稲作が日本の社会や信仰、祭礼などの中心となってきたことが指摘されるなど、この部分についての研究は盛んに行われてきた。しかしながら、雑穀も前述の通り稲と並んで重要な位置を占めていたにもかかわらず、体系的な研究はなされてこなかった。

そこで、本プロジェクトではこうした側面を打開するため、考古学的事象から雑穀について再検討するとともに、伝統文化における雑穀にまつわる事象をも含めてデータの収集・整理を行ない、様々な角度から雑穀について分析検討を加えて我が国における雑穀がもつ文化について明らかにすることを目指してきた。

具体的には、雑穀栽培と稲栽培の

初期段階を対象に、植物遺存体のデータ集成および整理を通して植物栽培全体における雑穀の位置づけを行なう作業、農具や食品加工の形態と消長などの情報から、雑穀にまつわる文化を抽出・整理する作業を実施した。

十八年度の活動

① 植物遺存体データの集成と整理
日本列島における植物利用のはじまりを明らかにするため、遺跡出土の植物遺存体データを集成し、植物の種類別、時代別に整理を開始し、この作業は一九九八年度発行分までの報告書に掲載されたものまで終了した。また、その傾向の分析を開始した。

② 収穫具に関するデータの集成と整理
収穫具は中国大陸の新石器時代に出現する。出現当初は雑穀の収穫に用いられていたが、数千年の時間と数千キロの移動を経て、日本列島に到達するまでに稲の収穫にも用いられるようになる。その過程と社会的背景を探り、稲作文化と雑穀文化の関係を解明することを目的として、日本の弥生時代の農耕の淵源と考えられている中国海岱地区(山東省を一部とする地域)の収穫具に関するデータ収集と整理を行った。また、稲作の伝播経路などについて共同研究員

の樂豊実氏(山東大学教授)より現地の研究現状などをご教示いただいた。

③ 雑穀に関する民俗調査

高知県東津野町においてはトウキビ、キビを中心とした「伝統的」な雑穀栽培と雑穀食を継承していることから、雑穀栽培と利用についての調査を実施した(平成十九年二月二十三日から二十七日)。近代化により雑穀加工に用いられる民具類は八十歳以上の高齢者にもみ実体験があり、聞き取り調査は困難を要した。しかし、雑穀加工の工程において従来考えられているよりも多くの加工方法が確認でき、また脱穀の際に用いる踏臼にまつわる口承などの貴重な情報を収集することができた。

十九年度の活動

① 全国雑穀食データの整理

雑穀利用の実態とその傾向を検証するために、日本各地に見られる雑穀の食物利用について、その種類、加工法、食べ方や食べる場などの情報整理を開始した。対象資料が多く、作業は現在も継続中である。また、整理対象とした事象の中には今日では廃れてしまったものもあるが、これまでの整理データの傾向によれば、少なくとも昭和五十年代までの我が国では、ほぼ全国にわたって、生活の様々な場面で盛んに雑穀が利用さ

れていたことが指摘できる。

② 雑穀栽培と道具に関する調査

雑穀の伝統的な栽培方法、年間のスケジュールとそれぞれの過程で必要となる道具類について、岩手県立農業科学館および北上市中央図書館において資料調査を実施した(平成十九年十一月二十七日)。

伝統的な雑穀栽培の農法は、現在では廃れつつある。しかし、県立農業科学館には昭和三十年代に収集した農具類が保管されており、雑穀栽培の年間のスケジュールと各段階で使用する道具類の情報を体系的に得ることができた。また、作物によって種蒔、収穫の時期が異なるため、冬場の僅かな時期を除くと、年間を通して常に何からの作物が収穫できることなど、稲作栽培との大きく異なる点を確認することができた。

成果と今後の課題

前述の資料収集および調査によって、雑穀は稲と並んで、近代までの日本列島においてごく身近で必要不可欠な食用植物であったことが確認できた。また、その生育状況や食用に至るまでの処理で使用する道具類に差異が見られ、一定でないことも指摘できる。それは地域によって作付けする雑穀の種類が異なっていることにも起因しているだろう。年間

を通して収穫期が一度だけの稲と比べて、雑穀類は収穫期が数回あるものもあることを考え合わせると、ここに稲と雑穀の大きな差異が指摘でき、稲作とは異なった信仰形態を考へる必要がある。また、祭礼行事に用いられる雑穀の種類と方法について、情報収集と検討もあわせて行う必要もある。しかし、いずれも資料収集とデータの収集整理および分析は作業の完結をみておらず、残念

プロジェクト報告

幕藩刑法とその刑罰の研究

信濃国田野口藩の改心囲について

高 塩 博

「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトは、平成十九年度に発足し、その年度をもって終結する。そもそも日本文化研究所における一期三年のプロジェクトとして計画を立てたのだが、組織の変更と部署の新設に伴い、新たに設置された「校史・学術資産研究センター」に配属替えとなり、一年間をもって廃止の仕儀とあいなった。そこで、この一年足らずの間に収集した資料の中から、与えられた紙面に見合ったテーマについての中間報告をおこない、成果

ながら雑穀にまつわる信仰を実質的に検証するまでに至っていない。プロジェクト発足当初は三年の計画で開始したが、短縮して本年度で事業を終了するにあたって、今後はこれらの成果を平成十九年度から交付を受けている科学研究費補助金事業「中国新石器時代における食品加工具に関する基礎的研究 使用痕分析からのアプローチ」などへ融合し、活用していく考えである。

報告に代えるものである。

田野口藩 大給松平氏が一万六千石を領有する家門の極小藩である。領地は三河国加茂・額田両郡に四千石、信濃国佐久郡に一万二千石を有し、三河国奥殿に陣屋を置いて奥殿藩を称した。第八代藩主松平乗謨は、文久三年(一八六三)十一月に統治の拠点を佐久領田野口たのくちぐちの陣屋に移し、藩名が田野口藩に変わった。田野口藩はその後、慶応四年(一八六八)五月に龍岡藩と改称し、龍岡藩は明治

四年(一八七一)六月に伊那・中野二県に分属するまで続いた。

改心囲「改心囲」とは、改善主義の考え方に基づく拘禁施設の名称であり、その制度をも意味する。この種の制度の極小藩における事例は、管見の限りでは論究されたことがない。ここに紹介する所以である。

改心囲は奥殿藩時代の安政六年(一八五九)三月、佐久領において創設された制度であるが、田野口藩を経て龍岡藩の明治三年三月まで存続したことが確認できる。したがって改心囲の存続期間は、奥殿藩時代が約三年六ヶ月、田野口藩時代が約四年八ヶ月、龍岡藩時代は少なくとも二年十ヶ月、都合十一ヶ月である。表題を「信濃国田野口藩の…」としたのは、信濃国佐久領における制度であること、田野口藩時代にもっとも長く実施されたことによる(三河国領内に改心囲やこれに類似した制度が存したか否かは未詳)。

改心囲についての解説は、地元の研究者市川武治氏がその著『大給藩から田野口藩へ 田野口藩陣屋日記拾い話(二)』(昭和五十八年、櫛)に記すのが管見に入った。すなわち、「改後囲 過怠・軽犯罪人を入れる簡単な檻おび囲いの建物、芝入れ・指籠入れなど非常に領村の人手を奪うので、安政六年(一八五九)役所は田野口

村にこれを作り、定番足軽一・中間一をつけ領下のものを入れた。服役中入費の一部を稼がせるため、藁細工をさせた。牢より破りやすいので、よく脱走があった」と(一六四頁)。

市川氏は右の著書に先立ち、「田野口藩陣屋日記」を主な材料とする『田野口藩歴史年表』(昭和五十六年、櫛)を著しておられ、この『歴史年表』に改心囲に関する記事を見いだすことができる。「田野口藩陣屋日記」を披見していないので、いまは同書に依拠して改心囲の内容を探ることとする。

改心囲の創設 安政六年三月条に改心囲の創設につき、『歴史年表』は「無宿無頼の徒・野非人など多く、領民に悪影響を及ぼす為、役所改心囲牢を作り、村々申出によりこれ等を捕え入牢の上、手細工をもって食費稼ぎをさせる件に付、村々名主呼び申渡す」と記す(二一九頁)。同年三月に、村々名主を招集して改心囲の創設を宣言し、その趣旨を明示したのである。施設の完成は同年十二月のこと、この時に管理責任者とその部下を任命した。同時に、その職務規程も定めている。これらのことについて同書は、「改心囲完成」、「改心囲定番、田野口村輝吉三両二人扶持召抱え」、「改心囲下番田野口村彦助、領分差出として召抱え」、「定番

勤め方定書渡す」と四項に分けて記す(二二二頁)。

収容者と収容の理由 最初の収容者は、「欠落中帰村」した入沢村の庄太夫であり、これは施設の完成と同時に改心囲入の申渡をする際、「請印帳に請書取る」と記事は記す(二二二頁)。「陣屋日記」の存するのは慶応三年(一八六七)までである。この時までの七年餘の間に十九人の収容者があった。収容者はいずれも領内の村民である。創設趣旨には「無宿無頼の徒・野非人など」とみえるが、『歴史年表』の記事では無宿と野非人との収容を確認できない。

十九人の収容理由は、「不行跡」が五人、「不行状」「行状悪しく」が三人、「不身持」「身持不埒」「二人」「風聞悪しく」が一人である。これらの人物は村人に迷惑行為をなす厄介者である。さらに「他領にて賭博」「村役人に暴言」「酒に酔い役所前にて雑言」「見廻に返答せず」が各一人、「欠落のち帰村」が三名である。これらは軽犯罪法違反とでも言うべき行為である。ほか一人は理由が不明である。こうしてみると、改心囲入の人々は、きわめて軽微な罪を犯した者や耕作などの仕事を放棄している放蕩怠惰の輩であった。改心囲とは、領下の「過怠・軽犯罪人」を収容する施設であるとする市川氏の解

説が了解されることである。

処遇法の一つ 改心囲入者に対する処遇の要項は、「定番勤め方定書」に記されていると思われる。しかし、「陣屋日記」の原文を確かめていないので、『歴史年表』の記事によつてその一端を記す。施設内では手細工を課業として食費を稼いだが(二二九頁)、改後の情の見られる者には外役を課すことがあり(二二七頁)、外役の際に着用する法被には、「改心」の背文字を白抜きに入れた(二四五頁)。病気に罹つた場合は自宅療養を認め(二二五・二二九頁)、老母の看護のためには村役人の申請により救済することさえもあつた(二二四頁)。

市川氏解説が「よく脱走があつた」と記すように、十九人の収容者中、五人が逃走している。そのうち入沢村の庄太夫は二度までも逃走し、ついに重敷のうえ入沢村十里四方追放に処された。以上にみたように、改心囲はかなり緩やかな処遇法であつたとみてよいであろう。

収容期間については、未詳である。『歴史年表』には釈放に関する記事が載せられていない。

改心囲の目的とその系譜 改心囲の名称が端的に示しているように、この制度の目的は収容者を改善し、共同体の一員として生業に復帰させる

ことが目的であつた。改後の様子の見られる者に外役を認めるという処遇法は、このことを物語っている。

改善主義に立脚した刑罰は、宝暦五年(一七五五)四月、熊本藩の徒刑に始まる。これが幕府の人足寄場を生み、やがて徒刑や人足寄場に学んだ政策が各地に誕生した。すなわち、犯罪人や放蕩無頼の徒を施設に収容して労役を科し、その間に改善を促して社会復帰を目指すという政策である。

プロジェクト報告

日本近代政治史の諸問題

井上毅の遺産と負債

本プロジェクトは、平成十四年度から十八年度にかけて、國學院大學日本文化研究所のプロジェクトとして実施され、十九年度には國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センターのプロジェクトに移管され、本年度をもって終了する。

國學院大學日本文化研究所においては、各専任教員がそれぞれの専攻分野と研究所設立の趣旨に応じ、研究プロジェクトを担当し、(一期三年、長くて二期六年が原則)、専門の非常

美作国津山藩(家門、五万石)の勤農所、督業場は、改心囲の先輩格にあたる。勤農所は耕作を怠っている不行跡者や不身持者を収容して、農業実習を行つて勤勞意欲を呼び起こさせ、かたや督業場は放蕩怠惰の町民を収容して職業訓練を施す施設である。前者は文化元年(一八〇四)九月、後者は天保十三年(一八四二)七月の設置である。幕末になると、極小藩にも改善主義に根ざす政策が及んできたといつことである。

柴田 紳一

勤スタッフの協力を得て、研究成果は単行書(外部の出版社から、または大学の自費出版的に刊行された)や報告書、年二回発行された『國學院大學日本文化研究所紀要』など学内外の学会誌に論文・研究ノート・史料翻刻などの形で発表してきた。

本プロジェクトは、平成八年度から十三年度にかけて、國學院大學日本文化研究所で二期六年行なわれたプロジェクト「立憲政治の日本の展開過程の研究 井上毅の遺産と負

債」を継承・発展させたものである。いずれの社会にも「政治」は発生し、日本にも独自の政治過程が展開した。本学の創設者であり「明治国家のグランドデザイナー」と称される井上毅が所持した膨大な史料群は現在本学図書館に「梧桐文庫」の名称で保管され、日本近代史研究上の最重要史料の一つとして評価されている(当プロジェクトも関与した『梧桐文庫総目録』に関しては、『國學院大學日本文化研究所報』第二四四号、平成十七年五月、参照)。筆者は、日本文化研究所の非常勤時代から「梧桐文庫」の中に多数残された明治政府の御雇外国人による「答議」(時の必要に応じ井上らが発した質問、主に欧米での先例など)に対する回答)を『井上毅伝外篇 近代日本法制史料集』全二十巻(東京大学出版会刊)として編纂する作業に当たっていた。

井上毅らの努力の末、日本はアジア最初の本格的な立憲国家となった。その後、近代日本は様々な政治運営を経過し、内政・外交・軍事・経済、それぞれの面で数多くの難題に直面し、昭和二十年の敗戦によって「大日本帝国」は終焉を迎え、現代日本が幕を開ける。近代日本の政治運営、内政・外交・軍事・経済上の諸問題の中には井上毅の危惧・予見したものもあり、一方井上の予想外の事態もあった。本研究は、日本近代政治史の研究を主題とし、内政・外交・軍事・経済の問題点も視野に入れ、先行諸研究の再検討、関係史料の調査・収集・分析を幅広く行ない、日本政治の特殊性の実態を解明することを目的とした。

プロジェクトのメンバーは、柴田紳一(國學院大學日本文化研究所助教・國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター准教授)・池田直隆(國學院大學日本文化研究所兼任講師・校史・学術資産研究センター客員研究員)・菅野直樹(防衛省防衛研究所史料室教官・同前)・高橋勝浩(宮内庁書陵部編修課主任研究官・同前)・冨塚一彦(外務省外交史料館・同前)・岡部直晃(関東学院中学校高等学校及川村高等学校非常勤講師)・種稻秀司(國學院大學大学院博士課程後期)・手塚雄太(國學院大學大学院博士課程前期)である。

この六年間の主な成果を列挙すれば左の通りである。

『深沢暹関係文書目録』

(平成十七年、日本文化研究所編刊、一七八頁) 柴田紳一、『深沢暹関係文書目録』の刊行を終えて、『國學院大學日本文化研究所報』第二四三号、平成十七年三月、参照

* 深沢は、外交官で吉田茂の二歳年上、中国問題を専門とし、吉田の側近の一人である。本

文書は、大正・昭和戦前期の日本外交史・日中関係史を知る貴重な史料である(原本は本学所蔵)。

プロジェクト編

『鵜沢総司』日露戦争出征日記

(國學院大學日本文化研究所紀要第九十八輯、平成十八年九月)

* 鵜沢は、歩兵第四十一聯隊長として日露戦争に出征し、沙河の会戦で戦死。日露戦争に

関し聯隊長の日記は僅少である(原本は靖国神社所蔵)。

『岡部直三郎日記』(昭和十三・十四年) 張鼓峰事件・ノモンハン事件とその前後 (同第九十九輯、平成十九年三月)

* 岡部には、岡部直三郎大将の日記(昭和五十七年、芙蓉書房刊)があるが、本翻刻部分は未掲載であった。この翻刻により、現存する岡部直三郎日記は全て紹介された(原本は個人蔵)。

『続・鵜沢総司』日露戦争出征日記(同第百輯、平成二十年三月)

柴田紳一

『昭和史上の責任』論をめぐって(國學院大學日本文化研究所紀要第九十輯、平成十四年九月)

『昭和天皇の『終戦』構想』(同第九十一輯、平成十五年三月)

『昭和十六年皇居内大本営防空室設置問題』(同第九十二輯、平成十五年九月)

『昭和十六年皇太子避難計画について』(同第九十三輯、平成十六年三月)

『皇族参謀総長の復活 昭和六年閑院宮載仁親王就任の経緯』(同第九十四輯、平成十六年九月)

『米内光政内閣成立の経緯』(同第九十五輯、平成十七年三月)

『宮内大臣松平恒雄の進退と政局』(同第九十六輯、平成十七年九月)

『陸相東条英機の出現』(同第九十七輯、平成十八年三月)

『東条英機首相兼陸相の参謀総長兼任』(同第九十八輯、平成十八年九月)

『陸相阿南惟幾の登場』(同第九十九輯、平成十九年三月)

池田直隆

『戦後日本外交における対中・対米関係の交錯』池田・佐藤内閣期(同第九十輯、平成十四年九月)

『シンガポール血債問題』と日本の対応(同第九十四輯、平成十六年九月)

『一九六〇年代の日英関係と中国問題』(同第九十六輯、平成十七年九月)

『一九四〇～一九六〇年代英米兩國の対日政策文書の調査につい

て』(同第九十八輯、平成十九年三月)

『昭和十六年皇居内大本営防空室設置問題』(同第九十二輯、平成十五年九月)

『昭和十六年皇太子避難計画について』(同第九十三輯、平成十六年三月)

『皇族参謀総長の復活 昭和六年閑院宮載仁親王就任の経緯』(同第九十四輯、平成十六年九月)

『米内光政内閣成立の経緯』(同第九十五輯、平成十七年三月)

『宮内大臣松平恒雄の進退と政局』(同第九十六輯、平成十七年九月)

『陸相東条英機の出現』(同第九十七輯、平成十八年三月)

『東条英機首相兼陸相の参謀総長兼任』(同第九十八輯、平成十八年九月)

て」(同第九十七輯、平成十八年三月)

「日中航空協定問題」(同第九十八輯、平成十八年九月)

高橋勝浩

『出淵勝次日記(七)完 回顧

談・主要著作一覧・関係系図・

主要人名索引」(同第九十輯、

平成十四年九月)

「外交再建としての対米特使派遣

構想 満州事変期を中心に」

(同第九十一輯、平成十五年三月)

資料翻刻「宮内庁書陵部所蔵三

上参次『御進講案』 その二下

五」(同第九十二下九十六輯、平

成十六年三月、平成十七年九月)

資料翻刻「宮内庁書陵部所蔵三

公開学術講演会

まつりの心と形

私たちの心の有り様と自然との関わり、そしてそれを在らしめている神的存在について、縄文時代から昔々と続く日本の基層文化という視点から考える。

縄文革命

約三万五千年前に、日本列島にい

上参次『御進講案』 追補 三上

参次略年譜・主要著作目録・主

要人名索引」(同第九十七輯、

平成十八年三月)

「満州事変未済発詔書について

清浦奎吾とその時局収拾策」

(同第九十八輯、平成十八年九月)

こうした積み重ねは、何と云って

も人と人との「御縁」に支えられて

いる。残された作業は少なくない。

また新たな思いもよらぬ「御縁」に

よる新史料との遭遇、研究課題との

出会いも予感される。今までの経験

と人脈や、次代を担う後進たちと

もに、これらに逐次取り組んでいく

所存である。

小林 達 雄

わゆる旧石器人が住みついて以来、約一万五千年前には定住的な村を営むという、日本列島に歴史上の最大にして最初の大事業が勃発する。これを縄文革命という。具体的にいえば、人類初期の遊動的な生活では、サルやチンパンジーやシカやイノシシ、あるいは小鳥、野鳥などの動物

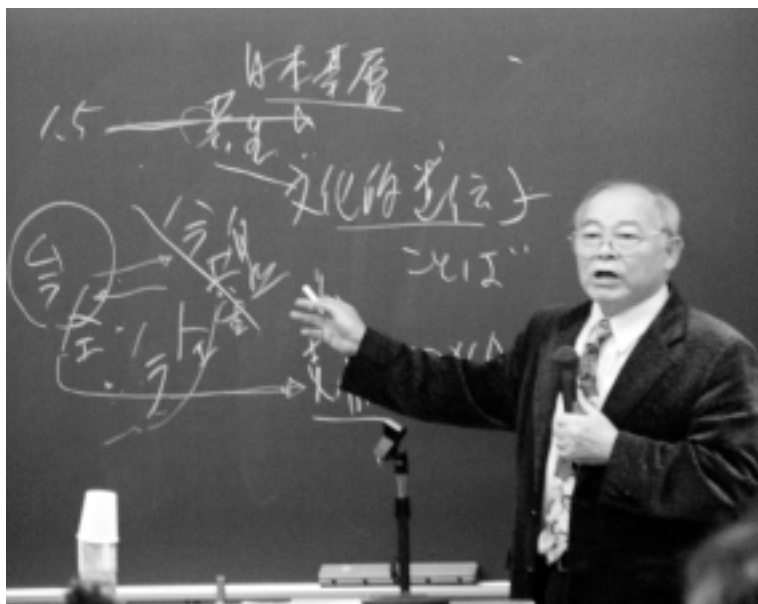
とあまり変わらないような生活であった。人といえども自然的秩序の中の一要素、一員として生かされ、動物たちと同格であるというような意味において、自然の秩序の中に組み込まれているという時代が続いていた。ところが、今から約一万五千年前に人がこの自然的秩序から離脱する。これが縄文革命である。

それは定住的な村を営むということであり、ヒトが他の動物や自然と縁を切って分離独立し、自然の一角を切り取って自分だけの空間を占領し、ムラを営むのである。

ムラには家、食料、材料を貯蔵する倉庫や穴蔵、共同墓地や公共的な広場などの生活に必要な様々な施設が計画性をもって造られた。それと同時に木、草、昆虫、動物など自然的要素が全て排除され、人工的な光景一色となったのである。

ムラとハラ

ムラで生活する中で、人は次第に動物ではないという意識を持つようになる。それを人間意識といい、これが後に様々な形となって現れるのである。



ムラの周囲に存在するハラは、自然的秩序が支配している世界であって、人はムラから出てハラで自然の恵みを利用し生かされてきたという共生の関係にあった。興味深いことに、一万五千年前の縄文革命以来、弥生文化が始まる紀元前九百から八百年ころまでこの関係は昔々と続いていたのである。自然との共生、ムラ・ハラの関係は、縄文文化の特徴といえ、日本文化の個性・特質というものはまさにここから始まるのである。比較例として、農耕が初期段

階から始まっていた中国大陸の新石器時代を見ると、ムラの外はハラではなくノラ(=耕作地)が取り巻いている。ノラでは、自然がムラと同じ思想で排除される。従って、ここではムラの周囲も人工であって、縄文のように自然ではない。

自然とともに生きる、つまり共生とは、一方的にはなく互いに相手を敬うことであり、この心が共生の中に必要なのである。これは自分たちは人間であるという人間意識としての主体性を意識するということであって、自然を下に見るといふことではない。大事な点は、動物や植物にも人格を与えてそれを認めることである。これは一万年以上のムラとハラの関係の中で必然的に発生し、生きてきた具体的な証といえよう。

儀式・儀礼

動植物に人格を与えたとしても、ヒトの理解を超えるところが多く、理解や解釈をすることは難しい。ここで、共生という精神に基づいて解釈や理解の方法を見出そうとしたものが、呪術だとか、儀式、儀礼である。我々人間の頭の中で処理できる合理的な方法を作り上げたのである。従って、儀礼や呪術は単なる思いつきにとどまるのではなく、集団の中で制度化しないと機能しない。例えば、森に入って焚火をする際には

森の霊に火を焚くことについて許しを得なければいけない、ハラに生えている木を切つて家の柱にしたいと思つても勝手には切れない、など、見えないものに許しを請い、集団の中で認められる必要がある。そして、その願望を叶えるために祈りがある。従って、祈りも同様に社会的な制度とならなければ効果はないのである。ある一定の形式があつて、例えば呪文や祝詞と道具、しぐさ、この3つの要素が一つの祈りを形式化するのである。

宮沢賢治の童話の中で「おーい、この木切つていいか」と問いかける、と、森が「いいぞ、よーし」と言つた。こんなヒトと自然とのやりとりは日本にしか存在しない。それは、縄文以来の一万年以上の自然との共生共死の関係からしか生まれて来ないものなのである。

第二の道具

縄文人がつくる呪術具の中で、例えば、刀は最初からは切れるものではない。しかし、後に金属が出現してからの刀と縄文人の作る石製、鯨骨製の刀の形状は瓜二つである。これは本来の刀としての役には立たないが、呪文やしぐさが加わると効力を発揮するもので、このようなものを第二の道具と呼ぶ。第一の道具は、食物を獲得し、加工して食し、消化

するまでの、いわゆる肉体を維持するのに必要な道具を指す。これらは人類にとつて普遍的な道具であることから世界各地に存在する。従って、そこから文化や心の問題を読み取ることは出来ない。第二の道具こそがその文化や時代特有のものといえる。

縄文には土偶、石棒、石刀、石冠、土版、岩版などの祭祀具、つまり、呪術、儀礼に関わる第二の道具が豊富である。例えば、エジプト文化にもスカラベを代表とする祭祀具が多くあるが、縄文にはそれよりも何千年も前から存在しており、その数も種類も豊富であった。第二の道具は縄文時代に極めて特徴的な遺物で、不思議なことに、その後にくる弥生文化には姿を消してしまつたのである。

祈りの場

祈りには儀礼の場、聖なる場が必要である。祈りの場を設ける時に、彼らはやはり自然界にあるものを手がかりとして、記念碑、モニュメントをつくる。それは集団の聖所であり、記憶の装置ともいえる。例えば大湯のストーンサークルでは、一人では運べない大きな石を七キロメートルも上流から引きずつて来て丸く並べていく。この作業は何の役にも立たないし、腹の足しにもならない。しかし、頭の足し、つまり心の充足がそこに保証されるのである。その

ための装置として、縄文人は百年、二百年の単位で記念物をつくるのである。ここには損得勘定などはなく、自然が対象であるから皆がそれを認めて実行する。だから象徴化することができ、継続して祭りが行われるのである。従って、こうした祭りが続く限り文化は安泰といえる。日本の各地で祭りの継続が危ぶまれているが、それは日本文化のある種の危機といえよう。

縄文人の様々な感慨所業を通じて、心や文化は縄文時代から現代まで連続と続いているものがある。それは、見え隠れしながら言葉に乗って現代の文化にまで継続してきた、つまり、文化的遺伝子として脈々として続いている。日本列島人が、川がサラサラ、ザブザブ、ピチャピチャ音を立てて流れるといった擬音語、自然の動きや音を表現し、匂いを聞き分けることができるのは、一万年以上の共生の関係があつたため、これは日本の基層文化の一つである。そして、こうした心は様々な人類文化、普遍の心にも繋がっていると云えるのではなからうか。

(なお、本稿は講演記録を要旨としてまとめたものである。加藤里美)

第三十三回 日本文化を知る講座①(平成十九年九月二十八日)

『人文資産の学術的価値と創出的発信 過去を踏まえ、未来に向かう』

國學院の学問を貫徹するもの

【校史・学術資産研究センター】

國學院の学問の過去、現在、

そして未来 三矢重松の意気

センター長 阪本 是丸

明治十五年に創立された皇典講究所以来、國學院大學は建学の理念・精神を「神道」に、その学問の基礎を「国学」に求めて現在に至っている。そのことは、学校法人國學院大學の寄附行為に「この法人は……古典を講じ神道を究め汎く人文に関する諸学の理論及び応用を研究教授し、以て有用な人材を育成し文化の進展に寄与する」(第三条)とあり、また國學院大學学則にも「本学は神道精神に基づき人格を陶冶し、諸学の理論ならびに応用を攻究教授し、有用な人材を育成することを目的とする」(第一条)とあることから知られよう。即ち、校名に冠する「国学」とは、「古典を講じ神道を究め汎く人文に関する諸学の理論及び応用を研究教授」する学問の謂いに他ならず、この学問の道統を近代に継承し、現代に発展させている唯一の大学が國

學院大學なのである。

「古典」を講じ、「神道」を究め、併せて広く「人文諸学」を研究・教授するための研究・教育機関が皇典講究所・國學院の使命であることを、國學院の第一期生であり、多くの有為な後進を育成し、本学初の文学博士となった三矢重松は「神道とは、かく広らかに云へば、とりとむべき点も無き絶大の者ながら、又、狭めて云へば、我が固有の大道即本教といふ者ともなるべし。先王は、惟神の道を体し給ひて、儒仏はた種々の外国の物事を採用しものから我が国体を時立せしめむには、代の進むまに、愈深く此の本教を發揮せざるべからず。古にはともありなむ。異邦の事物のかく盛に採用せらるる今の時に当りて、本教々理の光を顕さず、古典の晦蔵するは、全く学者の罪なり」と明快に喝破している(『古事記を讀みて思へるひとつふたつ』、『國學院雑誌』第四卷第十一、明治三十一年九月)。即ち、三矢は古典(古事記源氏物語等)の講究によって神道(本教)の精神を「言挙」することの必

要性を力説しているのであり、神道の「眼目」を「正直」「物のあはれ」に求め、「今この世界一品の旗幟の鮮明なるあり。之を押し立てて猛進せんに何ぞ躊躇すべき。斯の道にして明なるに至らば滔々たる三千年来の虚偽も希はくは掃蕩するを得むか。(言長翁の物のあはれの説は実に千古の卓説なり。翁を祖述する者すべからく之を継ぎて本教の美を濟すべきなり)」と述べている(『神道の眼目』、『國學院雑誌』第五卷第三、明治三十二年一月)。

この三矢重松に代表される国学的研究による神道精神の闡明・宣揚こそが、今日に至るまでの國學院の学問を貫く不易の学風である。近代的分化としての「神道」学だけに神道精神の講究・闡明・宣揚を任せ、あるいは任されたとする立場の否定にこそ、國學院の学問、即ち国学の眞価は存するのである。

「国史・国文」の國學院、神官・神職、教職の國學院。創立以来、長く戦後に至るまで國學院は、このような一定の(いい意味でも、半ば嘲りでも)社会的評価を受けていた。或るときは「国粹主義」の権化として、ま

た或るときは「リベラル」を殊更に吹聴した時期もあった。確かに、その双方が存在したことは事実である。しかし、時代の趨勢に押し流されつつも、ふと己を省み、「國の基」の何たるかを自問自答して創立以来の学問的営みを嘗々として続けてきたのが國學院ではなかったのか。かの折口信夫が大嘗祭の秘儀を説き、靖國神社の臨時大祭にしみじみと戦死者とその遺族の民族的思いを綴り、はたまた「神道の宗教化・神道の脱



皇室・天子非即神論」を唱えよつと、「代の進むままに、愈深く此の本教を發揮せざるべからず」との、前記三矢重松の言がすべてを物語っているのではないか。本居宣長らの理想とした太古純朴の神道の時代から、「神仏習合」の時代、そして「神仏分離」以降の時代、さらには現代にも、いつも「神道」は存在した。それを、あらゆる人文諸学の分野から明らかにしようとしたのが國學院の学問であった。宮地直一は皇典講究所の神職養成部門でその「神祇史」の体系化を与えられ、伊東忠太は「神社建築」を本格的に講義することを得た。折口信夫は「神道の神々」から独自の国文学・民俗学を開拓し、武田祐吉は記紀・万葉等の「古典研究の要點」は「昔を明らかにすることである。昔を明らかにすることは今日を明らかにすることである。即ち古人建国の意思を体得することである。人によつて古事記の見方も多少異なるが此の根本精神を逸してはならぬ」と説き、河野省三は「嗜み」に生きることの重要性を武田と同じ講演会で力説した。大場磐雄は文献的「神祇史」から「比較的雲過眼視」されていた「原始神道」を振興の学問である「考古学」によつて明らかにしようとした。

無論、これらの学者以外にも数多くの「国学・人文学」の講究に貢献・

寄与した者がいる。そして、それらの多くは「神道」に直接関与した学者ではないだろう。しかしながら井野辺茂雄が果敢に幕末志士の非道を「国史」の立場から明らかにし、高橋龍雄が「通俗」とされる文学や芸道に「日本文化」の真髄を明らかにしようとしたように、國學院の学問は勃興時代の国学のように、常に清新で革新的、そして反骨の気風に漲っていたのである。これら國學院の学問をそれぞれ個性で担った先人たちが残した「資産」をどのように有意義に継承し、使用すればよいのか。かつて、皇典講究所・國學院は「出版」という形で多くの「学術的価値」に富んだ「資産」を世に提供した。今日の國學院には、この百二十年余に亘る「人文資産」を「学術的」のみならず、社会的、そして国際的に「価値」あるものとして「発信」していくことが必要とされている。文部科学省二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の継承・発展、そして文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の鋭意遂行を中核とする「國學院の学問」の真価が今こそ問われているのである。

総合的学問「国学」を継承してきた
皇典講究所・國學院

助教 藤田 大誠

近代には、近世以来の神道講究を中核とする総合的学問「国学」という基盤から、近代人文学としての「国文学」や「国語学」、「国史学」、「法制史」などが専門分科して行くが、皇典講究所・國學院では依然として「国学」の火は絶やされなかった。

東京帝国大学教授の芳賀矢一は、明治三十六年の國學院同窓会における講演「国学とは何ぞや」(『國學院雑誌』一一一、一二)で、

「今日、大学では文学・史学それぞれ専門に分れてやつて居るが、國學院では、ベイツクの言つた通り、国学の名の示すが如く、一國の学といふことを中心として、すべての学問をやつていかなければなりません。国語・国文を基礎に置いて、国学のすべてを研究するといふことが、昔の諸大人のやつた事業でありますから、そのやつた仕事を基礎として、その上に新研究をそへて、合理的に歴史的に研究して行くのが、今日の明治の国学者の事業であらうとおもひます。」と語っている。

東京帝国大学では、すでに帝

国大学文科大時時の明治二十二年に国文学と国史が分科していたが、その翌年の創立以来「国史・国文・国法」を兼学してきた國學院では、文字通り「国学」としか形容出来ない学問が継続されていたのである。芳賀は、大正七年に國學院大學学長となつて九年の大学令による大学昇格を迎えることから、自身の主専攻である「国文学」の先に総合的な「国学」西洋の科学である「文献学」と伍すものとしての「姿を國學院の中に見据えていたといえるのである。また、明治三十一年の皇典講究所



規定で「本所八、左ノ方法ニ依リ、国学ノ進歩拡張ヲ図ルヲ以テ目的トス」とある中に「一、国学者ヲ集メテ本邦ノ典故文献ヲ講究スル事、二、國學院ヲ置キ、学生ヲ養成スル事、三、国学者ノ志願ニ依リ、其学力ヲ検定シテ本所々定ノ学階ヲ授クルコト、四、国学ニ関スル著作印行ヲ為ス事」と記されたことは、本学が明確な「国学的研究・教育機関」である証左である。特に皇典講究所・國學院の編纂・出版活動は、まさに近世国学の考証的営為を継承した近代国学の数多の研究成果を刊行したものであり、これらによって近代人文学の基盤整備がなされたのである。

例えば、明治四十一年より國學院大學出版部(当初は帝國書院発行)から出版された『國文註釋全書』二十冊は、室松岩雄編、本居豊頼・木村正辞・井上頼國の校訂によるが、その一冊目(平家物語抄他)の木村の序文には、「吾国文中の必要なるものを集め、其内より選択したるものなれば、国語国文研究者の座右欠べからざるものなり、且つその原本は、内閣秘庫の本、帝國図書館本、其他諸大家の蔵本にて、其校讎に従事したるは室松岩雄めしをはじめ、国学専修の人々なれば、校定の確実にして善本なる事、疑を容れず」とあった。この出版活動も、正しく「国学」の志を実行したものに他ならない。

重要と思われる諸本を見出して緻密に校訂し、その研究成果を社会に発信して行く、という根気のいる仕事を中心に行なっていた皇典講究所・國學院に関係する多くの国学者たちの出版活動や、大事業である総合的類書『古事類苑』編纂などという地道な営為なくしては、決して現

考古学と「こころ」

第三十三回 日本文化を知る講座②(平成十九年十月六日)
『人文資産の学術的価値と創出的発信 過去を踏まえ、未来に向かう』

【学術資料館考古学資料館】

考古学の誕生と発達

館長 吉田 恵二

歴史学のうち、文字記録を対象とする文献史学がヘロドトス以来二千年以上の歴史を持つのに対し、考古学は十八世紀になって古代ギリシャ・ローマの美術品の研究として誕生した。当時最大のコレクターであったローマ法王庁所蔵品を対象として彫刻品の様式的な変遷が明らかにされ、ここで確立された様式論と十九世紀に始まった化石人類の研究(先史学)とが合体して型式学を基礎とした考古学が確立されたが、今日世

在の人文系諸学問が成り立たないことは、厳然たる事実である。

今後、校史・学術資産研究センターに求められるのは、このような近代における本学の国学的営為の「顕彰」とともに、その出版物の当時の価値或いは現在の意義も含めた再「検証」の作業ではないだろうか。

界的に汎用されている考古学の学問体系が確立されたのは二十世紀初頭である。ヨーロッパにおける考古学の歴史の中でとりわけ重要なのはシユリーマンによるトロヤの発掘であり、建築学者を動員して何層にもわたる都市遺跡を正確に測量・実測し、これに写真を添えた報告書を刊行した。世界初の発掘調査報告書であり、これによって、美術的価値の高い遺物のみを求め、学術的記録をなら残すことのなかった乱掘に終止符が打たれたのである。

日本では明治維新以後、欧米の進んだ学問や技術を紹介するために企画された文部省百科全書の一冊とし

て明治十年に「古物学」の名で邦訳刊行されたが、これはほとんど普及することなく、またギリシャ語で古い物の意味に由来するARCHAEOLOGYを直訳したこともあって名称も適切である。他方、我国最初の考古学的発掘を行ったのはW. S. Morseで、明治十二年に大森貝塚を発掘し、『Shell Mounds of Omori』(大森貝塚古物篇)を刊行した。動物学者であり、また、日本に来たばかりのモースが大森貝塚から出土した縄文土器に対して的確な解説を下しえた背景には、大英博物館をモデルとした文部省博物館の開設準備室にいた蜷川式胤の助言があったといわれている。蜷川式胤は有職故実家で焼物に詳しく、明治九年に日本の古い土器や陶器を『延喜式』の記載を用いて解説した『観古図説』をフランス語版で自費出版している。学生として大森貝塚の発掘に参加した佐々木忠次郎らは明治十五年に茨城県陸平貝塚の発掘を行い、翌年に英文の報告書『Okadaira Shell Mounds at Hitachi』を出版している。日本人による最初の発掘調査報告書である。

明治十七年には神田孝平によって英文の『Notes on Ancient Stone Implements of Japan』(『日本太古石器考』)が出版されたのを契機に、人類学の会が結成され、坪井正五郎による手書き筆写回覧誌『じんるいが

くくわいよりあひのかきとめ』が作られた。ちなみに、すべて平仮名表記になっているのは、文学青年であった坪井が坪内逍遙が提唱した国民的平仮名運動に共鳴したからであった。そして、明治十九年には人類学会が創立され、我国初の学会誌『人類学会報告』が刊行された。この学会誌はその後『東京人類学会報告』『東京人類学会雑誌』『人類学雑誌』と名を変えて、今日に至っている。人類学会の中心となったのは、明治二十六年に開設された東京帝国大学理学部人類学教室で、坪井正五郎・鳥居龍蔵・小金井良精・松村暉・長谷部言人などが主導し、先史時代の研究が進められた。これに対して、明治二十九年に考古学会が創立された。その中心となったのは宮内省帝國博物館(後の帝室博物館・東京国立博物館)で、三宅米吉・高橋健自ら東京高等師範出身者らが主導し、『考古学会雑誌』を刊行して、歴史時代の研究が進められた。『考古学会雑誌』はその後『考古』『考古界』『考古雑誌』と名を変えて、今日に至っている。

他方、大正五年には我国最初の考古学講座が京都帝国大学文学部に開設され、濱田耕作が主導した。濱田は東京大学文学部西洋史学科でギリシャ美術を専攻し、早稲田中学で教鞭を執っていた時に抜擢されて京都

大学に招かれ、日本最初の考古学講座を開設するためにイギリスに留学し、ペトリーに考古学を学んだ。ペトリーはスウェーデンのモンテリウウスが確立した型式学をエジプト研究に開花させたエジプト学者で、濱田の死後に出版されたモンテリウウスの訳書『考古学研究法』は考古学徒の教科書として、日本考古学の発展に極めて大きく作用した。濱田が中心となって刊行された『京都帝国大学文学部考古学研究報告』『京都帝国大学文学部考古学資料叢刊』は我国における発掘調査報告書・図録のモデルとなり、現在もそのスタイルは息づいている。

京都で考古学教室が開設される一方、東京では東京帝国大学理学部人類学教室の坪井正五郎は國學院大學史学科で考古学を講じていた。考古学に関して國學院大學は私立大学の中では最も古い歴史をもち、大正十三年には東京帝国大学理学部助教であつた鳥居龍蔵が帝大を辞職して専任教授として赴任し、國學院大學の考古学の基礎が形作られた。鳥居は中学卒業後に上京し、独学で諸外国語をマスターして、帝大理学部人類学教室助手から助教にまで上り詰めた立志伝中の人物として戦前の国民学校教科書にも取り上げられていたという。中国・朝鮮・モンゴル・シベリアの人類学・考古学の調

査を敢行し、上智大学教授、北京の燕京大学教授を歴任した後、終戦後の昭和二十六年に北京から帰国した際には、空襲で焼失していた自宅の代わりとして、当時の文部大臣官舎が充てられたという。鳥居の薫陶を受けたのが樋口清之氏で、私財を投じて昭和三年に國學院大學考古学資料室を開設した。考古学資料室はその後規模を拡大し、考古学資料館となつて今日に至っている。同じ昭和三年には鳥居が中心となつて國學院大學に上代文化研究会が発足し、機関誌『上代文化』を創刊して考古学の発展に寄与した。また、同じ昭和三年には博物館事業促進会が発足し、昭和六年には日本博物館協会と名を改めて今日に至っている。

昭和初期の渋谷の考古学を論じる時に欠かすことのできないのが森本六爾を中心とする考古学研究会である。六爾は奈良畝傍中学出身で樋口清之氏の後輩にあたる。中学卒業後、中学時代の恩師でその後帝室博物館に移った高橋健自を頼って上京し、帝室博物館で遺物整理のアルバイトをしていたが、高橋とも喧嘩別れして無職となり、東京女学館の教師であつた夫人の収入に頼る状態で立ち上げたのが考古学研究会で、渋谷区羽沢の自宅を拠点とした。人類学会や考古学会が大学や博物館の後援を受けていたのに対し、孤立無援・徒

手空拳の状態であつたが、後に東京大学教授となつた八幡一郎、明治大学教授となつた杉原壮介、國學院大學教授となつた乙益重隆、京都大学教授となつた小林行雄など戦後の日本考古学をリードする若き考古学徒がここに集い、機関誌『考古学』をはじめ、『東京考古学会報』『考古学評論』『日本原始農業』『日本先史時論』『仏教考古学論叢』その他、日本考古学に新風を吹きこんだ。特に、弥生時代が単なる青銅器時代ではなく、稲作農耕を伴うものであることを立証したことは大きい。フランス留学の費用も夫人の家庭教師収入で賄う状況であり、留学中には林芙美子との恋愛事件もあつたようであるが、結核を患つて帰国した後、病気に感染した夫人が病死し、自身も昭和十一年に病没して、考古学研究会は消滅した。ちなみに考古学研究会の活動資金を担つたのは会員中ただ一人の社会人であつた坪井良平であり、その子息が清足氏である。

他方、鳥居が去つた後の國學院大學の考古学を担つたのは樋口清之・大場磐雄の両氏である。大場氏は神社局での勤務経験を基に神道考古学を確立し、祭祀考古学の基礎を作られた。樋口氏は渋谷区史の編纂やNHKドラマの時代考証に深く関わられ、退職後は國學院大學栃木短期大学学長として史学科の創設に尽力さ

れた。また、戦前の一時期には帝室博物館から移籍された後藤守一氏も専任教授として國學院大學で教鞭を執られたが、この事実は意外に知られておらず、戦後になって就任された明治大学教授としての名声の方が高い。

こころの形

考古学資料館蔵祭祀遺物

准教授 内川 隆志

昭和三年(一九二八)樋口清之博士によって創設された考古学資料館は、当初考古学陳列室と呼称されたが、昭和七年(一九三二)考古学資料室と改名した。樋口博士は國學院大學を卒業されると同時に国史研究室の助手の任に着かれて以降、考古学資料館を運営され、昭和二十七年(一九五二)には、博物館相当施設として指定され今日に至っている。考古学資料館には、樋口博士のご努力と人脈をもって開設当初より多数の考古遺物が蒐集され、昭和五十四年(一九七九)の退職の際には、自己資金で購入された多数の考古資料の全てを正式に國學院大學に寄贈する手続きをお取りになられた。

大場磐雄博士は、全国の神社宝物調査に奔走すると共に各地の祭祀遺物の踏査を実施された。昭和二年

(一九二七)には、南伊豆下田古佐美に所在する洗田遺跡の祭祀遺物実見に際し、遺跡の近在に聳える三倉山を目にし、霊山と遺跡の関係について新たな発想を得るに至った。洗田遺跡の衝撃は、後に「神道考古学」として大成させることとなる。博士による具体的な洗田遺跡の調査は、昭和十三年(一九三八)一月に実施され、土製勾玉、鏡など多数の祭祀遺物を発見、昭和十四年(一九一九)には、福島県建鉾山遺跡を調査、昭和二十四年(一九四九)より國學院大學教授となり茨城県常陸鏡塚古墳・長野県平出遺跡・東京都武蔵伊興遺跡・長野県入山峠・神坂峠・和歌山県那智経塚・神奈川県磯部祭祀遺跡など多数の祭祀遺跡を調査された。洗田遺跡・建鉾山遺跡その他、一部の資料は現在考古学資料館のものとなり、本館を特徴づける重要な収蔵資料となっている。その後も館の研究テーマとしても祭祀遺跡を見据え、今日まで多数の発掘調査を実践している。近年の調査を中心に、その代表的な遺跡と祭祀遺物を紹介しておく。

洗田遺跡(静岡県下田市) 昭和十三年(一九三八) 大場磐雄博士調査

調査によって多数の石製模造品、土製模造品を発掘し三倉山を対象とする祭祀遺跡と位置づけた。滑石製

の石製模造品には有孔円板・剣形・勾玉形・白玉があり、多量の土製模造品には鏡や勾玉が多い。土器は手づくねのミニチュアが多く、高坏を模倣したものも認められる。年代的には古墳時代中期の五〜六世紀頃と考えられている。平成十九年(二〇〇七)九月、國學院大學伝統文化リサーチセンターでは洗田遺跡を訪れ、遺跡から三倉山を拝した秋分の日没がその山頂部に見事に沈む事を確認した。遺跡の選地にそういったランドスケープの要件が考慮されていた可能性を示唆するものであった。

和泉浜遺跡C地点(東京都大島町) 平成五〜七年(一九九三〜一九九五)

伊豆大島に所在する七世紀後半、八世紀初頭の祭祀遺跡で、遺物の分布状況から遺跡全体の概要を述べれば、大きく五カ所の遺物集積が認められ、それぞれのブロックから湖西産の須恵器・土師器・石製模造品・ガラス玉・鉄製武器・金銅鈴・鈴・金銀製品などがそれぞれまとまって検出された。状況から極めて狭い範囲の中に、しかも短期間に形成された遺跡であること、須恵器や土師器が遠く畿内や遠江から運ばれていることから在地の人々による祭祀ではなく、畿内中央による祭祀が催行されたものと想像される。

堂ノ山神社境内祭祀遺跡(東京都利島村) 平成五〜十年(一九九三〜二〇〇三)

昭和三十三年(一九五八)東京都指定文化財に指定された和鏡十八面が出土した社域を再調査した結果、集石遺構に伴って十二世紀〜十六世紀に亘る多数の遺物が発見された。十二世紀後半に比定される二面の和鏡と十三世紀前半、十四世紀に帰属する合計四面の和鏡と銅版を円形に切り整えた儀鏡が集石遺構に伴って多数発見された。

阿豆佐和気命境内祭祀遺跡(東京都利島村) 平成十〜十五年(一九九八〜二〇〇三)

集落に祀られる里宮の境内で偶発的に発見されたもので、調査によって多数の中世祭祀遺物が検出された。中でも注目すべきは、十二世紀後半に遡る五基の小祠状の石組遺構である。概ね小祠の形状は自然石を一边凡そ一メートル程の「コ」字型に配置し、これらの小祠に向けて和鏡や古銭、銅板の儀鏡を奉祭する祭祀形態をとるものであった。調査で検出された遺物の内、十二世紀後半に遡る和鏡や同年代と看取される渥美窯常滑窯の遺物が検出されており、遺物相は遺構面より総じて古い様相を呈している。このような状況から本遺跡は、十二世紀後半に構築された

小祠が信仰の場としては継続しつつやがて埋没し、十六世紀中頃に新たなピークを迎え十七世紀前半まで継続したものと思われる。

八丈小島鳥打遺跡・宇津木遺跡の調査(東京都八丈町)平成三年(一九九一)

昭和四十二年(一九六七)に廃絶された八丈小島の旧村である鳥打村、宇津木村に所在する祭祀遺跡である。遺跡の形態は、村から離れた海辺に

屹立する岩場に大きな岩を取り囲むように多数の石の小祠を構築し、陶磁器や和鏡など多数の遺物を供献する形態をとる。地元ではこの祭りの場所を「イシバ」と称し、小祠の一つ一つにそれぞれ異なる神様を奉祭していたという。本土では見られない特異な祭祀形態であり、その下限は十六世紀後半まで遡り、信仰自体は村が廃絶されるまで継続したものである。

第三十三回 日本文化を知る講座③(平成十九年十月十三日)

『人文資産の学術的価値と創出的発信 過去を踏まえ、未来に向かう』

「もの」から見た神道の面白さ

【学術資料館神道資料館】

人々が信仰するにあたっては、その信仰心を具体化するためのさまざまな「もの」が存在する。そしてそうした「もの」には、信仰対象への意識と、人々の生活が反映されている。その実態をつかみにくいものとして、一般的に理解される神道においても、そのことは同様であり、日本に根ざした神々への祈りの心と、生活によって積み上げてきたさまざまな知恵が内在しているのであり、興味関心

を引くものも多くある。今回の講座「ものから見た神道の面白さ」では、二つの視点から、神道のもつ特色を明らかにすることを試みた。以下、それぞれ概要を示す。

神道の「こころ」かたち

館長 岡田 莊司

神道を言葉で表現することは難し

いものとされてきた。長い間言葉挙げないことを旨とし、秘儀性が大切にされてきたからである。神道は古代から現代まで、一貫して人々の間で神々への信仰とその精神(こころ)として意識されてきた。

そもそも、神は本来見る事ができない。しかし、人々は神の存在を形に表わして思考してきた。神は自然物、または人工物に顕れ、人々は作法を用いて祭祀を務めた。

神は「モノ」に宿るといふ。「モノ」は、一般的に物体のことを指すが、神々が来臨する指標も「モノ」といふ。大和・大神神社(奈良県桜井市)の祭神は大物主神といふ。また、軍事・刑罰を担当した物部という部民は、豊的なモノ(豊力)を統御できる呪術性を持っていた。他に物物の怪・物忌み・物実・物詣でもたらす存在を示す語である。

もともと、古代祭祀の「カタチ」とされてきたのは、神々の山と、神籬・磐座の祭祀である。神社の創設と、ゆるやかで落ち着きのある山との関係は切り離すことができない。大神神社の三輪山、春日大社(奈良県奈良市)の御蓋山、賀茂別雷神社(京都府京都市)の神山など、神道における「カタチ」の原点、美意識は調和のとれた山にこそある。「海の正倉院」と呼ばれ、数多の神宝が奉られ

た宗像大社(福岡県宗像市)の沖ノ島のカタチも、ヤマトの人々が三輪山を連想したに違いない。

そして、古代においては次々と神社神殿が創建されたものと考えられるが、伊勢の神宮(三重県伊勢市)諸社については、平安時代初期の神社の神体のことが『皇太神宮儀式帳』に示されている。それによると、神体には鏡・石・水などがあるが、石が最も多い。ただ、「形無」とされる神社もある。これは神座が空座の素朴な形式であり、寝具を用いた大嘗祭・新嘗祭の神座、御座・御茵・御衾が用意された神祇官八神殿とも共通する神来臨の場である。さらに、賀茂別雷神社も御帳台を設けている。同神社には神社と神山の中間に、常緑樹の木々を積み集めた神籬の「御生所」が用意されている。ここでは神山 磐座祭祀、御生所 神籬祭祀、御帳台 社殿祭祀といふ、神社祭祀の三階梯で表現された神祭祀の基本が、同神社にはある。

ところで、神殿の設え 御帳台・神座・几帳・神服・神宝 は、最高のもてなしの作法とされた。たとえば形が見えなくとも、最高の礼儀を尽くしたのである。また、神の食事、すなわち「神饌」も、海の幸・山の幸など豊かな最高の食膳が用意された。神宮神嘗祭の由貴大御饌をはじめ、賀茂祭・春日祭の神饌は、古く

からの形を伝えていいる。他にも、神の存在を伝えるために、神社の縁起、曼荼羅、祭礼図など、数多くの図像が描かれており、これらのいずれにも、神道の持つ信仰の心が込められているといえるのである。

國學院大學蔵『山王祭礼図屏風』
から見た神道の面白さ

講師 加瀬 直弥

祭礼の屏風絵は最近注目を集めているが、その描写と実態を比較するといくつかの特徴が見られるものがある。今回とりあげた國學院大學神道資料館所蔵『山王祭礼図屏風』(六曲一双)もそうした特徴を持っている。

この『山王祭礼図屏風』は、日吉大社(滋賀県大津市)で四月に行われる山王祭の江戸時代の様子を題材とした屏風であり、右隻に神社の東麓、坂本の地における御輿神幸を、左隻に、坂本のさらに東、琵琶湖上に浮かべた船に御輿を乗せ、御供を受ける唐崎沖まで進む船渡御を描いている。これは、南禅寺金地院(京都市京都市)所蔵の同名の屏風と全く同じ構図であり、様式化されたものであることが窺える。

描かれる神事は、山王祭を前後半に分けた場合の後半部分、すなわち、

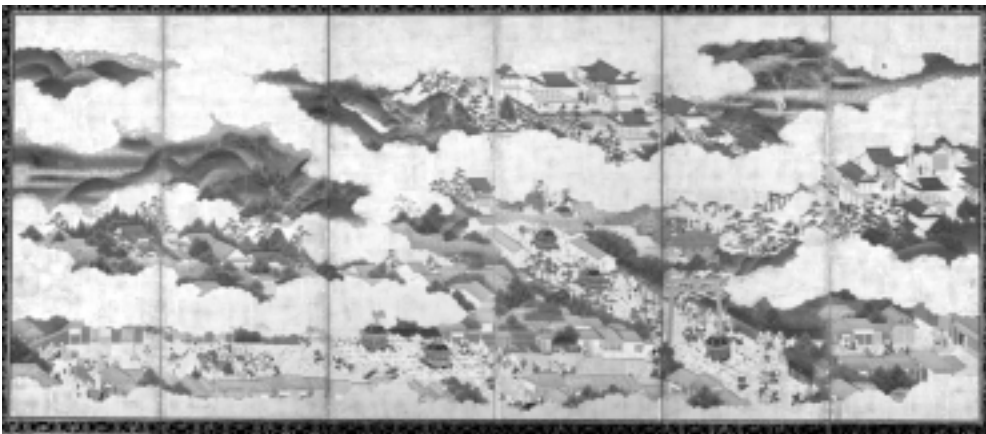
天智天皇の時代に三輪山・大神神社より神霊を遷した西本宮を中心とする神事(現在では四月十四日の日中)であるが、他方、背後にある八王子山から御輿が一気に駆け下りる「午の神事」(現在十二日夜)や、激しく御輿を揺さぶる所作を伴う「宵宮落とし神事」(現在十三日夜)など、比叡山の地主神とされる大山咋神が中心の、前半部の神事が描かれている。これは、屏風の題材を、比較的多く人目に触れるものに求めたものであることはいうまでもない(ただし、神道資料館所蔵の別の屏風では、夜の神事が描かれている例もある)。

また、この屏風の特筆すべき点は、御輿渡御に関する描写に力を入れているところである。具体的には、御輿の巡幸路が忠実に再現されている点、御輿やそれが乗る御座船を比較的大きく描いている点(特に左隻の船の描写は、それによって絵全体のバランスが崩れる程大きく描かれている)、が拳げられる。反対に、西本宮創建と深いかわりを持ち、御輿神幸に先立ち西本宮に置かれる神の伐木が描かれず、琵琶湖上で供物を捧げる側の船も、その描写が簡素なものになっている。これらは、ともに山王祭に必要な不可欠な木であり、船である。しかも、同じ構図を持つ金地院の屏風にははつきりと描かれているものである。屏風の作者が山王祭そのもの

の意義を十分理解して作成に当たったかどうか、判断に苦しむところである。

もつとも、賞断に供するためのものである近世の屏風に、現実の神事との関連性を求めることはややもすれば的外れかもしれない。しかし、

この屏風が描かれた近世にあつては、祭礼の由緒よりも、「人々が集いにぎわう」ことこそが、祭礼の意義であると考えられていたことは、描写の状況から窺い知ることができるのである。祭礼の持つ伝統性を考える上での参考にならう。



第三十三回 日本文化を知る講座④(平成十九年十月二十日)
『人文資産の学術的価値と創作的発信 過去を踏まえ、未来に向かう』
神道を外国人にどう伝えるか 【日本文化研究所】

神道を外国人にどう伝えるか(一)

講師 平藤喜久子

一、訪日外国人の増加と神道

近年、日本を訪れる外国人の人数は大幅に増加している。二〇〇三年に五二一万人だった外国人旅行者が、〇七年には過去最高の八三四万九千人を記録している(国際観光振興機構より)。観光客の増加と運動し、外国人が神社を訪問する機会も増加していると推測される。実際に平日に明治神宮に行けば、日本人よりも外国人の参拝客の方が目につき、有名な神社には、外国語で描かれた絵馬が数多く奉納されている。

二、神道を伝える必要性

マンガやアニメ、ゲームといったポップカルチャーも、外国人の目を神道に向けると二役買っている。これらの作品の多くが、他の言語に翻訳され、輸出されているが、中には神道に関係するものも少なくない。宮崎駿のアニメ「千と千尋の神隠し」はその代表であろう。「大神」(カブ

コン)という、オオカミの姿をしたアマテラスを主人公としたRPGなども、輸出されている。こうした神道と関係が深い世界を描きつつ、独自の世界を築いている作品が、外国人の神道への入口の一つになっている。このような状況下では、ネット上に神道の間違った情報が流れることも多々ある。そこで、神道について信頼性の高い情報を国際的に発信していく必要があると考える。

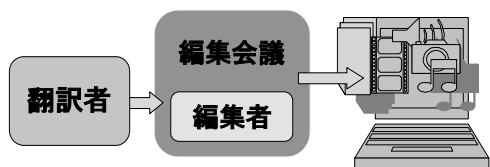
三、EOSの誕生

國學院大學では、日本文化研究所を中心に、神道研究の国際的展開に資するべく、インターネットを通じて、英語によるさまざまな情報発信を行ってきた。〇二年には二十一世紀COEプログラムに採択されたことを機に、國學院大學日本文化研究所が編集した『神道事典』(弘文堂、縮刷版一九九九年)の改訂英訳版Encyclopedia of Shinto(以下EOS)をオンライン公開する取り組みがはじめられた。すでに一部は神道文化化学部のノルマン・ヘイヴンス准教授らによって翻訳され、刊行されていた

め残りの項目を翻訳し、〇五年から公開している。では、EOS作成過程を簡単に紹介しよう。

翻訳には、英語を母語とするか、あるいは母語並に扱える、神道、およびその関連分野の研究者、約四〇名が関わった。彼らによる一次翻訳後、外国人スタッフが編集作業を行う。この段階では、訳語の妥当性を再考し、その統一などもはかられる。編集段階で解決できない問題は、より上部の編集会議に諮られる。この会議には学外の専門家も参加し、EOS構築についての議論がなされた。会議ではさまざまな問題が討議されたが、なかでも訳語については活発に議論された。

神道の用語の中には、日本独特の、あるいは神道独特の概念を含むものが多くあり、その訳語の決定は容易ではなかった。問題になった例として定訳のない明治期の「大宣教使」や「権大宣教使」などの語や、「物忌み」といった語が挙げられる。これら翻訳をめぐる議論は、日本人スタッフにとっても、神道を外国人に伝える際にどういっ



た点が難しいのか、考慮すべき点はないかを考える機会となった。

より使いやすい事典を目指して様々な工夫も施した。たとえばほとんどの項目に「音声」をつけ、アクセントがわかるようにした。項目に関連する画像、動画を作成し、理解を助けている。英語圏以外の人々向けに、各部のイントロダクションの五カ国語訳も発信している。現在グロッサリーの作成も進められている。

四、EOSの今後の展開

しかし今後さらに利用者にとって使いやすい事典としていくには、課題も残されている。

現在、検索語彙を入力するには、神道の用語をある程度知っている必

要がある。そのためまったく神道の知識がない人たちがEOSを使うには、工夫が必要となる。そこで神道の入門用コーナーの作成が企画されている。また、『神道事典』にはない新しい項目や新しい画像、動画も準備されている。さらには國學院大学の他のデジタルコンテンツとの連携も視野に入れている。

神道について信頼性の高い情報を英語で発信しているEOSは、今後外国人が神道を知るための入り口として、また外国人に神道を伝えるための手がかりとしても広く利用されていくことになるだろう。そのために、書籍とは違ったインターネット事典の強みを活かし、最新の研究成果、技術を反映させ、さらなる進化を目指したい。

神道を外国人にどう伝えるか(二)

所長 井上 順孝

一、神道を伝えようとする前に

これまで神道を外国人に伝えるという場合に、主に念頭におかれてきたのは、英語が母国語であって、しかも欧米の人々であった。しかし、今日において、英語は英米圏の人々の言語という側面とともに、グローバルなコミュニケーションの第一言語としての意味を強めている。

さらに英語以外の言語による神道研究の発信もその重要度が増してきている。そのような時代的背景を認識しつつ、神道を外国人に伝えていく場合の問題点を考えてみたい。

外国人に神道を伝える難しさについて、基本的なことであるが、まず次の二点を念頭に置いておかなければならない。一つは神道を伝える難しさは、そもそも日本について外国人に説明する難しさなどの特殊な場面であるということである。日本という対象を少し絞って、日本文化の説明としても、これを外国人に説明するときの困難さは、言わずもがなである。さらに日本宗教、そして神道への的を絞るということは、一方で日本を説明することに伴う困難さとともに、きわめて特殊なテーマが対象となることに伴う困難さが増加するということである。

もう一つは外国人の側からすると、われわれの試みはどう見えるかである。これは逆のことを考えると分かりやすくなる。われわれ日本人が他の国や異文化宗教をどれくらい理解しているかを考えてみることである。ヨーロッパや東アジアはある程度の知識はあるかもしれない。しかし、西南アジア、ラテンアメリカ、さらにアフリカとなると、国の位置さえ定かでない国も多いはずである。そうした国の宗教などにどの程度の間

心を抱くものであろうか。つまり、日本人にとってきわめて親しみの深い宗教ないし信仰形態であるとしても、たいていの外国人にとって、通常はほとんど関心の対象外の存在に等しいということである。

二、伝えることの意義

神道を外国人に伝えていくのは、まずは研究上の意義が大きいが、しかし国外の人々に自国の宗教を理解してもらおうと努めることは、今日の世界的状況が必要としていることでもある。

今日の世界では、他の宗教に対する理解の不足がもたらす紛争、トラブル、不快な出来事は頻繁に生じている。分かりやすい例は、二〇〇五年に起こったムハンマド風刺画事件である。これデンマークのユランズ・ポステン紙が、預言者ムハンマドのターバンを時限爆弾に見立てた風刺画その他を掲載したのが発端である。このことに反発する事件がイスラーム国でいくつか起こった。さらにこれに対抗して、翌二〇〇六年にイランの新聞が「ホロコースト風刺画」を掲載した。憎しみの連鎖になつてしまった。

神道に関することでも、現実には十分な理解がもたらす問題が起こっている。代表的なのが靖国問題である。中国や韓国では、神社といえ

靖国神社というくらい靖国問題がクローズアップされている。神社の歴史は二千年近くあり、その代表的存在といえれば伊勢神宮である。また全国に約八万ある神社のなかには、由緒ある神社も数多いが、もっぱら靖国問題にからめる形で神社について国外で論じられるというのは、どう考えてもバランスを逸している。

三、日本人自体の状況

神道を外国人に伝えようとするとき、あらためて気づかされるのは、日本人自体が神道、あるいは神社について、あまり深くは知らない、あるいは知ろうとしないことが多いということであろう。

二〇〇七年に「スキヤキ・ウエスタン ジャンゴ」という和製西部劇映画のポスターが問題となった。ギャンクに捕えられた村長が鳥居に首をつられている場面が使われたからである。これには神社本庁や神社関係者が抗議をした。聖なる領域への境界にある鳥居に死体がぶらさがるというのは、神社に親しみをもっている人には悪趣味に感じられよう。

神社についてさえ、あまり正確な認識が乏しいので、民俗神道と呼ばれるもの、さらに神仏習合の現状、神道系教団の理解となると、日本人自体もきわめてあやふやである。

年中行事や人生儀礼(通過儀礼)の

ほとんどは、神道と深く関わっているが、そのことがあまり意識されない場合もよくある。神仏習合は二つの独立した宗教が混ざり合ったというような単純な事柄ではないので、仏教と切り離して神道についての説明を完結させることはできない。神道系教団は神道と考えない人もいるが、しかし、近代の神道を考える上で、教派神道や神道系新宗教を神道から除外するわけにはいかない。

このような現状を考えると、外国人に神道を伝えるという作業は、日本人に神道について適切に説明するという作業と平行して行う必要性がある。

ただ、このグローバル化の時代は面白い現象も起きている。ペルシア湾に突き出た半島の国カタールにある衛星テレビ局のアルジャジーラが、初めて神道に関する十数分の紹介番組を作成し二〇〇六年に放映した。これは國學院大學、その他神社で実際に取材して作成したものである。なかなか好評であったと聞いている。このように、イスラーム圏の人々が神道に関心を抱くというケースもでてきているのである。どの文化圏からの関心にも応えらるるような紹介というものを心がけねばならない。



人事

(平成十九年度人事追加分 平成二十年二月一日現在)

日本文化研究所
研究補助員

ジェシー・ロバート・ラフィーバ

共同研究員

ドロシア・フィルス

伝統文化リサーチセンター

「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト
客員教授

内山純蔵、松本岩雄

共同研究員

細谷葵、宮尾亨、錦田剛志

外国人研究員

高秀慶

「神社祭祀に見るモノと心」プロジェクト
ポスドク研究員

小島優子、筒井裕

リサーチアシスタント

新木直安、鈴木聡子、横山直正

会議

全体

・第一回研究開発推進機構運営委員会 五月十六日(水) 十八時~二十時 若木タワロー五会議室

・第四回企画委員会、六月二十七日(水) 十一時~十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム

・第二回研究開発推進機構運営委員会、七月五日(木) 十六時~十七時、若木タワロー五会議室

・第五回企画委員会、九月六日(木) 十一時~十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム

・第三回研究開発推進機構運営委員会、九月二十七日(木) 十一時~十二時三十分 若木タワロー五会議室

・第六回企画委員会、十月三十一日(水) 十一時~十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム

日本文化研究所
「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」プロジェクト会議、六月七日(木) 十時~十二時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、六月十四日(木) 十六時~十八時、日本文化研究所プロジェクトルーム

第三回デジタル・ミュージアム企画会議、六月二十日(水) 十五時三十分~十七時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」学術フロンティア関係会議、七月四日(水) 十時三十分~十二時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、七月五日(木) 十七時~十八時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、七月三十一日(火) 十五時~十七時、日本文化研究所プロジェクトルーム

第四回デジタル・ミュージアム企画会議

議、八月一日(水) 十五時三十分~十七時三十分、本館三階会議室

・第二回所員会議、八月四日(土) 十時三十分~十二時、若木タワロー五会議室

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、九月五日(水) 十五時~十七時、日本文化研究所プロジェクトルーム

・第五回デジタル・ミュージアム企画会議、九月十九日(水) 十五時~十六時三十分、本館三階会議室

・第三回所員会議、九月二十日(木) 十四時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、十月十一日(木) 十五時三十分~十七時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」学術フロンティア関係会議、十月十七日(水) 十一時~十三時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、十一月十五日(木) 十五時三十分~十七時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

・第六回デジタル・ミュージアム企画会議、十一月二十一日(水) 十五時~十八時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、十二月十二日(水) 十五時三十分~十七時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

学術資料館

・第一回学術資料館会議、七月十八日(水) 十六時~十七時三十分、若木タワロー一会議室

・学術資料館考古学展示策定会議、九月二

十七日(木)十六時~十八時、日本文化研究所プロジェクトルーム

校史・学術資産研究センター

「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクト文献班会議、六月四日(月)十八時~十九時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、六月二十六日(火)十五時~十六時、日本文化研究所第五研究室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、七月二十四日(火)十五時~十五時五十分、日本文化研究所第五研究室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、九月四日(火)十五時~十六時三十分、日本文化研究所第五研究室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、十月十六日(火)十五時~十六時、日本文化研究所第五研究室

第三回センター会議、十月三十日(火)十四時三十分~十六時三十分、神道文化学部資料室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、十一月二十日(火)十五時~十六時三十分、日本文化研究所第五研究室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、十二月四日(火)十五時~十六時三十分、日本文化研究所第五研究室

「梧桐文庫」を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト会議、十一月十五日(火)十五時~十六時三十分、日本文化研究所第五研究室

築と運用」プロジェクト会議、一月十五日(火)十五時~十六時四十五分、日本文化研究所第五研究室

出張

平成十九年度

内川隆志 学術資料館・考古学資料館 平成十九年度考古学資料館学術調査に関する打合せのため、庄内町教育委員会社会教育課、六月四日(月)~五日(火)

岡田莊司 学術資料館・神道資料館 平成二十年度開館予定の学術メディアセンター棟展示スペースにおける神道関係考古遺物模型作成のため、大神神社、六月十六日(土)~六月十七日(日)

加藤里美 学術資料館・考古学資料館 平成二十年度開館予定の学術メディアセンター棟展示スペースにおける神道関係考古遺物模型作成のため、大神神社、六月十六日(土)~六月十七日(日)

高塩博 「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、(財)網走監獄保存財団、六月二十日(水)~二十二日(金)

池谷浩一 学術資料館・神道資料館 文部科学省オープン・リサーチ・センター選定事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」プロジェクト「神社祭祀に見るモノと心」の研究に伴う「神道関係文化財データベース」の制作に必要な文化財に関する電子データの提供等協力を依頼するため、神社本庁教学研究研究所、六月二十一日(木)

岡田莊司 学術資料館・神道資料館 平成二十年度開館予定の学術メディアセンター棟展示スペースにおける祭壇模型作成のため、姥澤稻荷神社、六月二十三日(土)

大澤広嗣 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、八坂神社、七月二十二日(日)

大澤広嗣 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、八坂神社、七月二十二日(日)

大澤広嗣 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、大山阿夫利神社、八雲神社、七月二十七日(金)

松本久史 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、七月三十日(月)~八月三日(金)

田中秀典 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、七月三十日(月)~八月三日(金)

横山直正 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、七月三十日(月)~八月三日(金)

加藤里美 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県埋文センター、七月三十日(月)~八月五日(日)

新原祐典 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県埋文センター、七月三十日(月)~八月五日(日)

杉山林継 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、七月三十一日(火)~八月一日(水)

高塩博 「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、東丸神社、八月八日(水)~十二日(日)

西岡和彦 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、吉井家(竹原市)、広島県立文書館、八月二十七日(月)~三十日(木)

料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、吉井家(竹原市)、広島県立文書館、八月二十七日(月)~三十日(木)

江頭慶宣 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、吉井家(竹原市)、広島県立文書館、八月二十七日(月)~三十日(木)

平藤喜久子 「日本神話の神話学的研究」プロジェクトによる発表・調査のため、ウィーン国立アカデミー、九月十日(月)~十八日(火)

加瀬直弥 学術資料館・神道資料館 平成二十年度開館予定の学術メディアセンター棟展示スペースにおける展示資料作成のため、北野天満宮・賀茂御祖神社、十月三日(水)~五日(金)

内川隆志 学術資料館・考古学資料館 映像撮影(山ノ神遺跡出土遺物)のため、大神神社、十月二十一日(日)~二十二日(月)

加瀬直弥 学術資料館・神道資料館 平成二十年度開館予定の学術メディアセンター棟展示スペースにおける展示資料の検品ならびに資料作成に伴う資料調査のため、ピスケットクラブ(模型製作業者)・天理大学付属天理図書館、十一月八日(木)~九日(金)

加藤里美 「雑穀文化と日本の基層信仰」プロジェクトによる調査のため、岩手県立農業科学博物館、北上市中央図書館、十一月二十七日(火)

平藤喜久子 「日本神話の神話学的研究」プロジェクトによる調査のため、ロンドン大学SOAS校 The National Archives、Bibliothèque nationale de France、十一月十九日(水)~二十九日(土)

所蔵資料紹介

祇園祭礼絵巻(神道資料館所蔵)



嘉永元年(1848) 冷泉為恭作 絹本着色 37.0×1284.5cm(本紙34.0×1131.5cm)

「家を建てる時には、夏の暑さを考えて建てるべきだ」とは、吉田兼好『徒然草』の教えである。京都の夏は、確かに尋常でなく体にこたえる。何か悪いものに取り憑かれたような、背後から覆いかぶさってくる重さがある。平安時代に姿を表した、激しく人々の感覚を刺激し昂ぶらせる風流の文化は、そんな暑さに弱った人々の生命力を賦活するかのよつに、京の夏に祇園会という大輪の花を咲かせた。

日本各地の山車祭りの原型になったともいわれる祇園会は、特に山鉦の巡行が、十六世紀以来、「洛中洛外図屏風」や「月次風俗図」などの風俗図を中心に、しばしば描かれてきた。神道資料館にも、山鉦巡行を描いた近世の絵画資料が、複数所蔵されている。その中でも、「祇園祭礼絵巻」一巻は、作者と年代が明確で歴史的な価値の高い資料である。

この絵巻は、幕末の画家、冷泉為恭が嘉永元年(一八四八)に描いた作品で、町並みや人々の生活風景に祭りの情

景を描き込んだ風俗図ではなく、祭礼行列に焦点を当てて描く祭礼図に属す。内容は、巻首に祇園社(八坂神社)を描き、続いて旧暦六月七日の「前祭」の山鉦二十三基、同十四日の「後祭」の山鉦十一基を描いている。具体的には、以下の山鉦である。

- 六月七日「前祭」の山鉦
 - 長刀鉦、占出山、(四条)傘鉦、保昌山、蟻螂山、函谷鉦、芦刈山、放下鉦、破琴山、月鉦、霰天神山、郭巨山、菊水鉦、山伏山、綾傘鉦、木賊刈山、太子山、鶏鉦、楽天山、牛天神山、岩戸山、孟宗山、船鉦
- 六月十四日「後祭」の山鉦
 - 橋弁慶山、鯉山、黒主山、上観音山、下観音山、行者山、鈴鹿山、浄妙山、鷹山、八幡山、船鉦(但し、鷹山は「ちかこころ出さす」と注記あり)

この絵巻からは、祭りを巡る街の様子や都市風俗を知ることができないが、山鉦本体の形態に関していえば、鉦の上部に取り付けられている天王台の人形や、山に立つ松に

掛けられた鈴が描かれるなど、細かな描写がなされている。また、山鉦に乗っている稚児や囃子方、囃子方が手にしている鉦、太鼓に笛、さらには山鉦からの「粽投げ」も描かれており、嘉永元年当時の山鉦の巡行時の姿をかなり詳細に知ることができる。

また、夕立による山車飾りの汚損により文政九年(一八二六)を最後に休山となった鷹山が、往時の姿で描かれているほか、元治元年(一八六四)の大火で焼失して以来休山となっていた後祭の船鉦や、天保五年(一八三四)から元治元年に焼失するまでの二十一年間だけ鉦の形態をとっていた綾傘鉦の姿も、描かれている。

この絵巻は、幕末維新の動乱や近代化の波が祭りに影を落とす直前の、いわば祇園会の最後の輝きを、今に伝えてくれている。夏の暑さは変わらずとも、祭りは人の世に従って移り変わり、時にこのように変化の断面が描き留められるのである。